



完全独習型ネット哲学講座

プラトン・アカデミー

第Ⅰ部 初期ギリシャ哲学

目次

第1章 ミレトス学派

- ①タレス ②アナクシマン드로ス ③アナクシメネス

第2章 クセノファネス

第3章 ピタゴラス学派

第4章 ヘラクレイトス

第5章 エレア学派

- ①パルメニデス ②ゼノン

第6章 多元論

- ①エンペドクレス ②アナクサゴラス ③デモクリトスの原子論

第1章 ミレトス学派

① タレス

断片しか遺っていない初期の哲学者たち

これから「初期ギリシャ哲学」というカテゴリー（分類）に入る哲学者たちをご紹介しますが、その前に知っておくべきことがあります。

それは「初期の哲学者たちの著作はほとんどすべて散逸している」ということです。

一般的に「ソクラテス以前」と呼ばれることが多いですが、ソクラテスより前の時代の哲学者たちが書いたものはほとんど遺っていないのです。

ただし後世の哲学者や学者たちが「誰々は……と言った」などと、昔の思想家の言葉をしばしば引用してくれているため、間接的に僕たちに伝わっているものもあるのです。

このような、間接的に遺っている言葉をよく「断片」と言います。

著書自体が1冊まるまる保存されている例はゼロ（！）ですが、研究者はあちこちの断片をかき集めることで、初期哲学者たちの思想を理解しようとしているのです。

やはり断片ですから、全体像の把握には限界があります。

僕たちに見えている初期哲学者たちの思想は大いに歪んでいる可能性もあります。いや、その可能性のほうが高いでしょう。

しかしながら、断片的でおぼろげであったとしても、彼らの思想には魅力があります。

合理的に思考しようとする古代の人々の息吹を感じることができますし、それがやがてソクラテスやプラトンの成熟した哲学へとつながっていくのです。

場所は現在のギリシャではないことも……

それでは以上を前置きとして、一般的には「最初の哲学者」と呼ばれているタレス（前624頃ー前546頃）について解説していきます。

タレスが生まれたのは紀元前7世紀（紀元前600年代）のことです。

現在はトルコという国がある小アジア（アナトリア半島）のエーゲ海沿岸の南部を当時は「**イオニア地方**」と言い、そこにはギリシャ人たちが入植して植民都市を築いていました。そこは古代ギリシャ文化が花開いた土地で、『イリアス』『オデュッセイア』などの神話を詠った詩人ホメロスもそこで活躍したと言われています。

タレスが生まれたのはイオニア地方でも最大の繁栄を築いたミレトスという都市でした。タレスや彼の弟子たちがこのミレトスで活躍したことから、彼らのことを「**ミレトス学派**」と呼びます（図1）。



図1 イオニア地方の位置

ギリシャ哲学なのにトルコ……!?

最初から混乱するかもしれませんが、「ギリシャ哲学」と言っても、それは現代のギリシャ共和国がある場所で生まれた哲学だけを指すわけではありません。

曖昧な定義かもしれませんが、「ギリシャ人（＝ギリシャ文化の中で育った、ギリシャ語を話す人々）の生んだ哲学」はすべて「ギリシャ哲学」と呼びます。

場所は現代のトルコであっても、ギリシャ人がギリシャ語で展開した思想ですから「ギリシャ哲学」なのです。

当時はギリシャ人たちが地中海全域に進出していましたから、現在のギリシャではない地域の話がしばしば出てきますが、驚かないようにしてください。

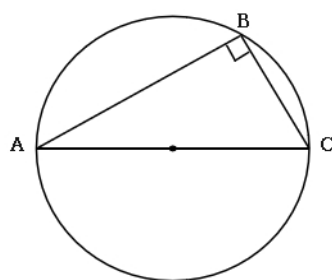
タレスの科学的業績

さてタレス自身はおそらく著作を書いておらず、彼についての情報は後世の作家たちによる伝承から推定されたものです。

タレスは政治家や技術者など多面的な活躍をしたとも言われていますが、中でも有名なエピソードは紀元前 585 年 5 月に起こった日蝕を予言したことでしょう。彼はおそらく何らかの観測記録から日蝕の時期を割り出したと思われます。

こうした天文現象が「神のなせる業」として恐れられていた時代にあって、タレスの合理的精神が際立っていたことが分かります。

またタレスは、彼の名を冠した「タレスの定理」を証明したことでも有名です。これは「点 A、B、C が円周上の異なる 3 点で、線分 AC が円の直径であるとき、 $\angle ABC$ が直角である」という定理です。



文章だと分かりにくいかもしれませんが、上の図で B のところの角が直角（90 度）になるということです。

エジプト留学中にピラミッドの高さを計算したという話もあり、彼は「最初の哲学者」と呼ばれると同時に「最初の数学者」とも讃えられているのです。

アルケー（万物の根源）は「水」である

ここで1つだけ哲学用語をご紹介します。

それは「**アルケー**」というギリシャ語で、日本語では「万物の根源」あるいは「始源」と訳されることが多い言葉です。

いろいろ解釈はありますが、アルケーとは要するに「世界を構成している究極的な素材」のことだと理解するのが一般的です。

タレスのみならず初期ギリシャ哲学にとってずっと重要なテーマでありつづけたものです。

現代の僕たちも、この世界は「水素」「酸素」「鉄」「銅」「炭素」「ナトリウム」などさまざまな素材からできていると考えていますよね。

こうした素材（元素）の正体は原子です。そして原子は陽子・中性子・電子からできていて、さらに陽子や中性子は素粒子から……という具合にどんどん分解してゆけます。

古代のギリシャ人たちも（違った形ではありますが）同じように「どんどん素材の素材を探っていくと最終的に何に突き当たるのかな？」と考えたんです。

そのようにして最終的に突き当たる素材（あらゆるものがそれからできあがっている素材）を「アルケー」（万物の根源）と呼んだというわけです。

さて「アルケー」がこのような意味であるとして、タレスはそのアルケーを具体的にどんなものだと考えたのでしょうか？

タレスによれば世界のアルケーは「水」です。

世界のあらゆる物質は、水がさまざまな変化を起こした結果として存在するというのです。水そのものはもちろん、硬い大地も薄い大気も、人間や動物の肉体もすべて水が変化したものだというのです。

タレスの真意とは？

タレスは世界のアルケーを水だと考えた……。

これが哲学史の公式見解です。どのテキストにもだいたいそう書いてあるでしょう。

しかし少し詳しい専門書を読むと、これに若干の留保をつけていることもあります。

タレスが水を重視したのは間違いないとしても、それを「あらゆるものの素材となる根本的物質」だと考えていたのかどうかは分からないというのです。

何しろタレス自身の著作は遺っていないので、なかなか判断が難しいんですね。

むしろタレスは多くの観察をした結果として、「自然界にとって水がどんなに重要な役割を果たしているか」を強調したということなのかもしれません。

雨が川となって海に流れる。それが蒸発して雲となりまた雨となる。その循環の過程で大地や動植物や人間たちを潤し、川の運ぶ土砂は大地を形成する……。

タレスはこうした自然の営みを目の当たりにして、水の重要性を説いたということなのかもしれないのです。

あるいは世界そのものの素材であるかどうかはともかく、神話的に「世界は水の中から生まれた」と考えていた可能性もあるでしょう。

メソポタミア（ほぼ現在のイラク）やエジプトの神話では、世界は水から誕生したというストーリーが多いのです。「海の神ティアマトから万物は生じた」とかですね。

これら先進地域の神話の影響をタレスが受けていたとしても不思議ではありません。

結局のところタレスがどんなことを主張していたのか、考えられることとして以下のようなものがあると思います。

- ① 水は世界の究極的素材（根本物質）である。
- ② 水は世界にとって一番大事なものである。
- ③ 水の中から世界は生まれた。

タレスはおそらくこのうちのどれかを主張していたのでしょうし、おそらくはニュアンス的にすべてを含んでいた可能性が高いでしょう。

すぐ後で出てきますが、タレスの弟子や孫弟子も世界のアルケーを探究しました。

彼らは何を世界のアルケーだと考えたかはそれぞれ違いますが、それが何であれ彼らがアルケーと見なしたのものにはやはり①②③のすべての意味が込められていると思えます。

さてタレスが当時としてはとても合理的な思考をしていたことは確かですが、彼に始まる哲学という営みが宗教や神話を否定したというわけではありません。

タレスはもちろん、彼に続く哲学者たちもほとんどは宗教的世界観・神話的世界観の中に生きていました。

しかしそれまでのように宗教や神話をただ無批判に受け入れるのではなく、論理的思考や実証的精神によってそれを自由に検証したり裏づけたりする姿勢が出てきています。

タレスは神話の影響を受けながらも、その神話的世界を合理的的精神をもって探究するという新たな潮流を生み出しました。

その意味で、彼はやはり時代を画する思想家であったと言えるでしょう。

② アナクシマンドロス

アナクシマンドロス（前 610 頃—前 540 頃）はタレスの弟子です。師と同じくミレトスで活動しました。

アナクシマンドロスもまた多方面にわたる活躍をしたようです。まず科学者としては「日時計を作った」「世界地図を作成した」などの話が伝えられています。

そしてミレトスの人たちが新しい植民都市を建設すべく移民団を送った際、彼らを指揮した政治家だったとも言われています。

非常に多才な人物ですね。

無限なるもの（ト・アペイロン）

さてこのアナクシマンドロスも世界のアルケーについて考察しています。

師のタレスはアルケーは水だと言っていた。

ではアナクシマンドロスは何をアルケーだと考えたのか？

答えは……「ト・アペイロン」（無限なるもの）です！

ト・アペイロン……？？

こう言われても何が何だか分かりませんよね。

僕も初めて哲学史を習ったときにはさっぱり意味不明でした。

手元にある高校倫理の教科書でも「アナクシマンドロスは『無限なるもの』をアルケーだと考えた」とあるだけで詳しい説明はありません。

これがどういうことなのか、僕なりにアナクシマンドロスの考えを想像しながら簡単に説明してみます。

↓↓↓↓↓

タレス先生は「水こそが世界のアルケーだ」と言った。

しかし自然界には水以外にも大事なものはたくさんある。例えば空気は大事だし、火だって大きな役割を果たしている。土だってそうだろう。

それなのに水だけを特別視して「それが世界の根本物質だ」とか「そこから世界が生まれた」とか断言していいものだろうか？

むしろこういう水だとか火だとかはお互いに関係し合いながら世界の事物を形づくっているように思える。これらは同じ次元の存在である。

世界に根本的・絶対的なアルケーがあるというなら、水・火・空気・土といった具体的なものではなく、それらを超越したものであるはずだ。

水・火・空気・土といった基本的な素材ですらそこから生じるような「正体不明の何か」なのではないか。

↑↑↑↑↑

おそらくこのような思考経路でアナクシマンドロスは「ト・アペイロン」（無限なるもの）という考えに到達しました。

この「ト・アペイロン」というギリシャ語は何通りかに解釈できるようです。

例えば「無限な（限界がない／無尽蔵な）もの」とも解釈できるし、「無限定な（特定・限定することができない）もの」とも解釈できるということです。

おそらくその両方なのでしょう。

それは「これだ！」と具体的に特定できるようなものではないし、それでいて（世界の材料ですから）無限にたくさんあるものでなければなりませんからね。

宇宙創成論

後世の研究者たちによれば、アナクシマンドロスは宇宙そのものの誕生、天地や諸天体の誕生、生物や人類の誕生などを含んだ壮大な宇宙創成論を説いていたようです。

後世の著作家たちの報告があるだけなので、思想の正確な全体像は分かりませんが、かなりスケールの大きな体系的哲学者であったと推定されるのです。

アナクシマンドロスは「まずト・アペイロンから対立的・相反的なものが生まれ、そこから大地や天体など万物が生じた」と考えていたと報告する文献もあります。

中国思想の「陰と陽」のように、対照的な2つの原理によって世界を説明する思想は多いですが、アナクシマンドロスもそうだったというわけです。

アナクシマンドロスの場合、対立的・相反的である「冷たいもの」と「熱いもの」とが相互作用することで世界が形成されると説いていたようなのです。

その後もギリシャ哲学では、対立物（熱と冷／乾と湿……など）の相互作用によって世界ができているという発想が受け継がれていきました。

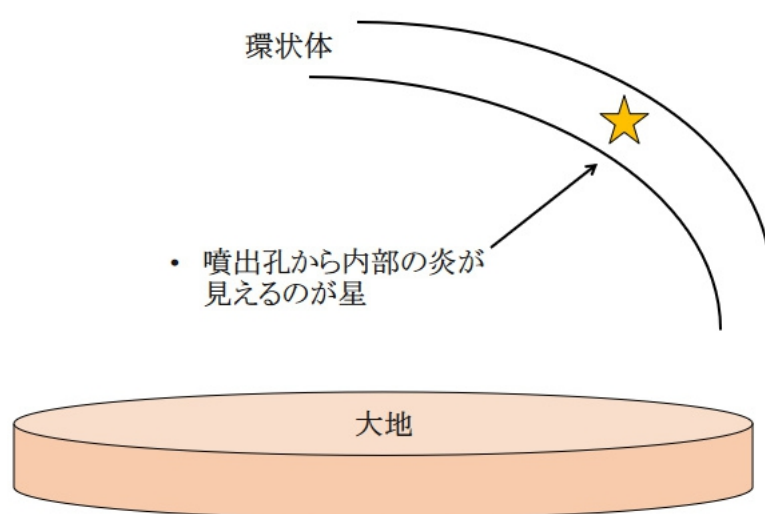
こうした考え方の原型がすでにアナクシマンドロスに見られるわけですね。

さて、大地は横に広い円柱形ですが、「大地は宙空（何もない空間）に浮かんでいる」と言っているところなどは宇宙空間に浮かぶ地球のイメージに近い気もします。

そして車輪に似た「環状体」がいくつも大地を囲みながら回っていて、太陽や月や夜空の星々はそれにくっついていっていると言われています。

環状体というのは、おそらくリボンや映画フィルムのような形がイメージされているのですが、その中には炎が閉じ込められているというのです。

そして環状体には裂け目あるいは噴出孔があって、そこから中の炎が見える。それが輝く天体だというわけです。



これが人間たちを取り巻く世界ですが、アナクシマンドロスはこのような世界は無数にあると考えていたようです。

ト・アペイロンは無尽蔵ですから、ト・アペイロンからできる世界も無限にたくさんあるというわけですね。

そしてアナクシマンドロスは、そういった世界の1つひとつを神だに見なしていたという後世の報告もありますが、詳細なところは分かりません。

さらに「最初の生物は海で誕生し、そこから形態を変えながら陸上に進出していった」と説明しています。これなどは現代の進化論そのまんまですね。

そのマルチな活動といい、アナクシマンドロスもまた師タレスに負けず劣らずの大天才であったことが分かるでしょう。

③ アナクシメネス

アナクシメネス（前 585 頃－前 525 頃）もミレトスの人でアナクシマンドロスの弟子です。名前が似ているので間違えないようにしましょうね。

アルケーは空気だ

アナクシメネスもまた世界のアルケーを探究しました。

そして彼がアルケーに選んだのは「空気」です。

師のアナクシマンドロスは「よく知られている具体的な物質がアルケーではあるまい」と考えてそれを「ト・アペイロン」と呼んだのでした。

それに比べると弟子のアナクシメネスはやっぱり具体的な物質をアルケーと見なしたということになりそうです。

アナクシメネスは、かつて「水」をアルケーだと論じたタレスのような発想に（物質は違いますが）逆戻りしているように思えます。

アナクシメネスの思考回路を想像してみましょう。

↓↓↓↓↓↓↓

アナクシマンドロス先生は具体的な物質よりももっと根源的な何か（ト・アペイロン）があると考えて、それをアルケーと言った。

先生の言いたいことは分かるが、大元にあるのがそんな正体不明なものだとすると、そこからどうやって私たちのよく知る物質が出てくるのか説明できなくなってしまう。

超越的で正体不明なもの、水・空気・火・土といった具体的なものと、どんな関係にあるのかなど調べられないからだ。

やはり具体的な物質のどれかをアルケーと特定して、それがいろいろと変化することでそれ以外の物質になると考えたほうがいいのではないか。

そう考えれば、自然を実際に観察することでアルケーから他の物質が発生する様子も調べることができるだろう。

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

アナクシメネスはこう考えて、私たちに身近な空気こそがアルケーにふさわしいと考えたのだと思われます。

タレスは「水」を特別視しましたが、水にはその対立物として火というものがあります。

根源的な物質はそういう対立を超えていて、水にも火にも変化できそうなものがある。

そういうものを選ぶとしたらやはり「空気」になるだろうという発想は分かります。

しかもある意味で、空気は師アナクシマンドロスの説いたト・アペイロンに一番近いものだとも考えられます。

空気は普段は目に見えず、あらゆる場所に遍満し、しかも無尽蔵です。これはト・アペイロン（＝無限・無規定）の性格を最もよく引き継いでいると言えるでしょう。

濃密化と希薄化

アナクシメネスは空気が他の物質へと変化する仕組みも説明しました。

それが「濃密化」と「希薄化」です。

彼によると、空気が希薄化すると「火」になります。

反対に空気が濃密化すると「風」となり、さらに濃くなるにつれて「雲」「水」「土」「石」へと変化していくというのです。

アナクシマンドロスの説では、ト・アペイロンから「熱いもの」や「冷たいもの」が生じ、それらが混ざることによって世界が形成されていくのでした。

しかしながら、ト・アペイロンからどうして熱いものや冷たいものが生じるのか、その理由は（少なくとも遺されている資料では）明らかにされていません。

それに対して、アナクシメネスの濃密化・希薄化という考えは、根源的物質（空気）からいかにして他のものが生じるのかをクリアーに説明しています。
これはアルケーを具体的なものにしたからこそできたことですね。

アルケーは神的な生命原理

さてミレトス学派のアルケー（万物の根源）についての思索を見てきました。

タレスは水。

アナクシマンドロスはト・アペイロン（無限なるもの）。

アナクシメネスは空気。

そしてタレスのところで説明した以下の3つの考え方は、後続する2人にも共通しているように思えます。

- ① アルケーは世界の究極的素材（根本物質）である。
- ② アルケーは世界にとって一番大事なものである。
- ③ アルケーの中から世界は生まれた。

そして伝承されているミレトス学派の言葉からは、彼らは自分がアルケーだと考えたものを、同時に「神」と同一視していたことが分かります。

アルケー（万物の根源）とは世界を構成する究極的素材であり、不死・不滅であり、自然と生物を育む生命の原理であり、世界がそこから生まれた根源でもあるのです。

彼らがアルケーを神聖視し、神と見なしたことも当然でしょう。

従来、ミレトス学派は「神話から脱却した哲学の始まり」と捉えられ、宗教との相違が強調されがちだったかもしれません。

しかし彼らのアルケーが神のようなものだとするれば、彼らの説は彼らなりの「神学」だったという見方も成り立つのではないのでしょうか。

しかしながら、民族ごとに内容が異なる神話とは違って、ミレトス学派のアルケー論は民族を超えて通用する普遍的真理を探究したものです。

彼らがギリシャ神話に登場するゼウスやアポロンといった具体的な神々についてどう考えていたのかは不明ですが、アルケーはそういった個性的な神々とは違ったものです。

そういう意味では、合理性を大きな武器とした「新たな思考法の胎動」が感じられます。新しい時代の息吹がそこにあったのです。

第2章 クセノファネス

ペルシャ帝国がイオニア地方へ侵出

ミレトス学派の3人の次に挙げるべき思想家としてはクセノファネス（前570頃—前470頃）という人がいます。

クセノファネスの人生は、その時代の文化動向を象徴するものとして重要です。

まずはそのあたりの話から。

紀元前6世紀（紀元前500年代）の半ば頃になるとペルシャ帝国（アケメネス朝）が強くなり、周囲の国々を圧迫するようになります。

ペルシャ帝国は現在のイランを中心に栄えた国ですが、メソポタミア（現イラク）・小アジア（現トルコ）・エジプトなどを短期間で次々に制圧していきました。

小アジアの南西部（エーゲ海沿岸）にあるのがイオニア地方ですので、その地で栄えていたギリシャ人たちの文化もペルシャの脅威に曝されることになります。

イオニアのギリシャ文化が西方へ伝播

ペルシャ帝国の圧迫に直面して、イオニア地方から脱出してイタリア半島やその先のシケリア島（シチリア島のギリシャ風の言い方）へと逃れるギリシャ人が増えていきます。それに伴って「イオニアで栄えたギリシャ文化が西方に移植されていった」という歴史的経緯があるのです（図2）。

やがてタレスたちが活躍したイオニアの中心都市ミレトスも陥落します（紀元前494年）。さらにペルシャはギリシャ本土へも遠征しますが、こちらは都市国家アテナイなどの奮戦によって撃退されました。

世界史で習った「**ペルシャ戦争**」というやつですね。『300〈スリーハンドレッド〉』シリーズなど、映画でもしばしば描かれる時代です。

こうして、ギリシャがオリエント（東方）のペルシャに完全に呑み込まれてしまう事態は回避されたわけです。

ではペルシャ帝国に吸収されたイオニア地方のギリシャ文化は衰退したのかというと、意外とそういうわけでもなかったようです。

ペルシャ支配以降のイオニア地方でも有名なギリシャ人哲学者が幾人か輩出しています。ペルシャ帝国の支配はわりと寛容なもので各地の文化を尊重していたからでしょう。

さてクセノファネスはイオニア地方のコロフォンという都市の出身ですが西方に移住し、主にシケリア島で活動しました。

上で「彼の人生が当時の文化動向を象徴している」と述べたのはこのような意味です。

後述する有名なピタゴラスもクセノファネスとほぼ同世代の人で、イオニア地方のサモス島からイタリア（クロトンなど）へ逃れています。

このクセノファネスとピタゴラスは「イオニア文化の西方伝播」の象徴と言えるでしょう。



図2 イオニア文化の西方伝播（紀元前6世紀～）

神を擬人化するギリシャ神話への批判

さて、クセノファネスは哲学的な内容をちりばめた詩を詠う人でした。

彼の詩には（現代風に言えば）自然科学的な知識も多く含まれています。もともとイオニア出身ですからミレトス学派の思想にも精通していたと考えられます。

例えば彼は「内陸部や山岳部にも海の生物の化石が見られる」「だから大地は隆起と沈降を繰り返しているはずだ」と述べていて、その見識の高さと合理性に驚かされます。

しかしクセノファネスの真骨頂はやはりその宗教思想にあると言えます。
彼は詩人ホメロスが詠ったような伝統的なギリシャ神話を厳しく批判したのです。
どういうことか？

ギリシャ神話を読んでもみると、そこに登場してくる神々がとても人間的で生き生きとして
いることが分かります。
いい意味で人間的であるだけならいいのですが、ギリシャの神々は「殺す」「盗む」「浮
気をする」「騙す」「謀略をめぐらす」などなど、悪い意味でも人間的なのですね。

こういう内容を子供たちに話して聞かせようという気は起きません。「神様たちもこうい
うことをするんだ」と思われるのは教育上よくないでしょう。
クセノファネスは「人間たちにとってさえ恥ずべきものとされる行為を神々に行わせてい
る」としてホメロスを痛烈に批判したのです。
このあたりの考え方は後のソクラテス（≡プラトン）にも受け継がれています。

さらにクセノファネスに言わせれば、「神々を不道徳に描いていること」だけが問題なの
ではありません。
そもそも「神々を人間のような姿に描いていること」がすでに大間違いだと言うのです。
確かにゼウス・アポロン・アテナ・ヘラなど、彼らの姿はほとんど人間そのままですね。

これについてクセノファネスはとてもエッジの利いた有名な批判をしています。
もし動物たちが神々の姿を描けるとすれば、馬たちは馬に似た神々の姿を、牛たちは牛に
似た神々の姿を描いただろう……と。
後世のキリスト教神学でも「結局のところ、神は人間と似ているのか似ていないのか」と
いう論争があったようですが、こうした問題を先取りしていたわけです。

唯一神の思想

さらに特筆すべきはクセノファネスが「唯一神」の思想をハッキリと説いたことです。
この「神は唯一」という思想は伝統的なギリシャの宗教観（多神教）からすれば異端です。

ここにはミレトス学派の「アルケー」理論が影響している可能性もあるでしょう。
彼らにとってアルケーとは神的な生命原理でもあったのでした。
水であれト・アペイロンであれ空気であれ、アルケーは世界全体に遍満して万象万物を生
み育むものと考えられていました。

そう考えるとアルケーは1つであると言えます。「1つ」という数え方に違和感があるとしても少なくとも「1種類」であるとは言えるでしょう。

クセノファネスもこうした見方に影響されて、唯一の根源的な力こそが神であると考えたのではないのでしょうか。

彼にすれば、人間のような姿をした多くの神々があちこち動き回るなど笑止千万だったのでしょう。

この時代、すでにユダヤ教（一神教）は登場しつつありましたが、それでも唯一神の思想は古代においては珍しいものでした。

脱線しますが、紀元前14世紀のエジプト王だったイクナートン（アメンホテプ4世）が多神教だったエジプトの宗教を改革して一神教にしたことがあります（すぐに挫折）。

ユダヤ人たちはこの頃エジプトで奴隷生活をしていたわけですが、彼らはイクナートンの改革に影響されて一神教を確立したという説もあるのです。

このように、多神教がメジャーだった古代世界でも一神教を主張する「変わりダネ」が時々出てくるのですが、クセノファネスもまたそういう人物だったわけですね。

人間の無知

クセノファネスは「人の身で確かなことを見た者は誰もいないし、これから先もそれを知る者は誰もいないだろう」と語っています。

人間の知識や認識には限界があることを自覚していたのですね。

後にソクラテスが「私は大切なことについて無知であることを自覚している」という「無知の知」を説きますが、クセノファネスの考えもそれに似ています。

これはクセノファネスが「何も信じるな！」というタイプの懐疑主義者であったということではありません。

彼は人間的な智慧の限界を自覚しながら、「探究によってよりよいものを発見していくべきだ」とも語っているからです。

努力すれば何らかのよき知識を得ることができると述べているわけです。

このあたりの考え方もソクラテスの先触れになっていると言えるかもしれません。

クセノファネスは「〇〇派」という風に一括りにできるような仲間も見当たらず、1人だけ屹立している感のある思想家です。

しかしそれでも、その後の思想界に大きなインパクトを遺した人物であると評価できるのではないのでしょうか。

第3章 ピタゴラス学派

順序として次に取り上げるべきはピタゴラス（前 570 頃誕生）でしょう。

クセノファネスとほぼ同世代と考えられ、（ペルシャの脅威と直接の関係はないようですが）イオニア地方から西方へ移住したという点で共通しています。

しかしながら後世への影響力という点では、ピタゴラスははるかにクセノファネスを凌駕しているのです。

第1章の図1 よりもう少しイオニア地方を拡大した地図を載せておきます（図3）。

サモス島がピタゴラスの出身地です。コロフォンはクセノファネスの出身地ですね。

エフェソスというのは、後にキリスト教の重要な公会議が開催された場所です。

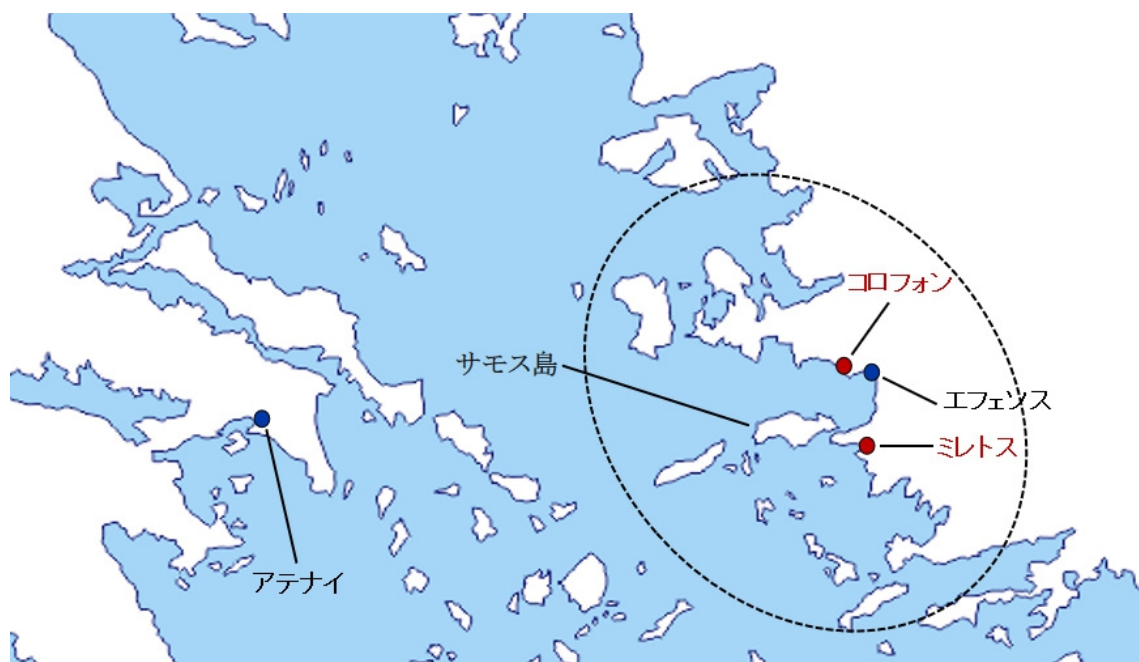


図3 イオニア地方の拡大図

神秘のベールに包まれたピタゴラス

おそらくあなたも学校で「三平方の定理」というのを習ったことがあるでしょう。

直角三角形の3辺の長さの関係を表す定理です。「斜辺の長さを C、残りの辺の長さをそれぞれ A および B とすると、 $C^2 = A^2 + B^2$ 」が成り立つ」というアレです。

これは別名「ピタゴラスの定理」と呼ばれていて、その名の通りピタゴラス（学派）が発見したものと言われています。

要するにピタゴラスは数学者だったわけです。

しかし単に数学者であったというだけではなく、もっと広い意味での哲学者でもありましたし、さらに言えば宗教家でもありました。

近年の研究者の中には「ピタゴラスはシャーマン（霊と交信する人）だった」と言う人もいて、そうだとすれば宗教家としてもかなり本格的です。

ピタゴラスはサモス島の出身ですが、当時のサモス島ではポリュクラテスという僭主（力で君主の座を篡奪した者）が独裁をしていました。

ピタゴラスはそれを嫌い、南イタリアのクロトン（図2）に移ったと言われています。

彼はクロトンで「ピタゴラス教団」を創設して、学問と宗教の両面で人々を指導していたとされています。

教団には政治的な影響力もあったようで、反対勢力に弾圧されてクロトンから移住したり、ピタゴラスの死後には集会所を襲撃されて離散するといった出来事もありました。

ピタゴラス教団はある種の秘密結社であって、内部でどんなことが教えられているのかは口外禁止でした。

そのためピタゴラス本人はもちろん直接の後継者たちも著作を遺していません。

こういう事情があるので（伝説はいろいろとあるのですが）ピタゴラスの実像は神秘のベールに包まれています。

しかしピタゴラスから100年くらい後になると（フィロラオスなど）彼の系統の中から著作を遺す人も出てきますし、外部からも信頼できる証言が出てきたりしています。

したがってピタゴラス学派の説をある程度は再構成することができるのです。

とは言え、それらの説のうち、どれがピタゴラス本人のもので、どれが弟子や後継者たちのものなのかは混然一体としていて判別できません。

ですので以下の説明もざっくりと「ピタゴラス学派の説」だと思って読んでください。

転生輪廻の思想

ピタゴラス学派でまず何よりも重要なのは「魂の不死」と「転生輪廻」（生まれ変わりの思想）です。

↓↓↓↓↓↓

人間の魂は死んでも滅びることはない。そしてその魂は何度も何度も肉体に宿って生まれ変わってゆくのだ。

しかし「肉体に宿って生活する」ということは、本来なら自由な魂にとっては牢獄生活のようなものであって罰そのものである。

したがって何らかの方法でこの転生輪廻という苦しみから脱する必要がある……。

↑↑↑↑↑

だいたいこんな思想です。

各種統計によると、現代では「魂の不死」を信じる人も減少していますが、「転生輪廻」に至ってはさらに信じる割合が低いようです。

しかし転生輪廻を否定するキリスト教やイスラム教が各地に広がるまでは、世界中で常識的に信じられていました。

なお現代に入ると、1960年代にヴァージニア大学のイアン・ステューブソンが転生輪廻を研究し始めて以来、科学的調査がなされるようになりました。

ステューブソン没後も、同大学では後継者らによって研究が継続されているようです。

注目したいのは、古代の最良の人々が「肉体や肉体に由来する欲望というものは、汚れなき魂にとっては苦しみである」と捉えていたという点です。

これが頭に入っていないと、古代の賢人たちの智慧はまったく理解できません。

ピタゴラス学派の思想に関しては、この時代にギリシャ世界で広がっていた「**オルフェウス教**」という宗教と関係があるのではないかとされています。

ギリシャ神話にオルフェウスという竖琴を持って詠う詩人が登場しますが、伝説ではこのオルフェウスが創始したと言われている宗教です。

いつ頃からあったのかはよく分かっていないようですが、とにかくオルフェウス教では「苦しみの転生輪廻からの離脱」を説いていました（宗教的な表現では「解脱」ですね）。

確かに思想がそっくりなので関係はあったと思います。

さらに言えば、ほぼ同時代にインドで起きていた初期仏教ともそっくりです。

さすがに「ピタゴラスと仏教には関係があったのだ！」と断言する自信はありませんが、意外と古代人の行動半径をナメてはいけないようなので、あり得ない話でもないでしょう。

このピタゴラス学派やオルフェウス教の「永遠の魂が転生輪廻する」という思想は、ほぼそのままの形で後世のソクラテスやプラトンに継承されていくことになります。そしてそれがさらに西洋思想の大きな核になっていくので、この点だけをとってもピタゴラス学派の後世への影響は絶大なものがあります。

数学と魂の浄化（カタルシス）

さてオルフェウス教では、罰としての転生輪廻から解脱するために儀式を行ったり厳しい禁欲生活を送ったりしていたようです。

ピタゴラス学派も宗教集団ですので同じようなことをしていたかもしれませんが、他の宗教とは大きく異なる特徴が1つありました。

それは「**学問研究（とくに数学や音楽）が魂を浄化し、魂を身体の束縛から解脱させる手段となる**」という考え方です。

ピタゴラス学派にとって、学問研究をすることは宗教的に救済されるための手段でもあったわけです。この魂の浄化のことを「**カタルシス**」と言います。

現代人にとっては「何じゃそりゃ？」という発想かもしれませんが、僕は理解できるような気がします。

例えば日本が誇る世界的数学者だった岡潔（1901－1978）が言うところによると、数学の問題を解くことは「宗教的な悟りを開く」感覚に近いものだということです。

難しい数学の証明問題をウンウン苦しみながら考えている状態は、それこそ山岳修行者が険しい山道を歩いているようなものでしょう。

そしてハッと数学の解法を思いつく瞬間は、修行者がハッと霊的インスピレーションを得て悟りを開く瞬間に相当するわけです。

確かに数学というものを世界の根底にある摂理のようなものだと考えるなら、数学修行に励むということは、世界の摂理や神秘に触れる魂の修行なのかもしれません。

哲学にもこれと同じことが言えると僕は信じています。いえ、哲学は数学よりもさらに幅広い真理を扱うものですから、それ以上の功德があるはずです。

音楽に隠れた数学的構造

ピタゴラス学派の大きな業績として「音楽に数学的構造が隠れていること」を突き止めたこともよく知られています。

↓↓↓↓↓↓

一弦琴（弦が1本の琴）を用意する。

まずそのまま鳴らしたときの音を基準（基音）とする（分かりやすくするためにドの音だとします）。

弦の長さを最初の2分の1にして鳴らすと1つ高いドの音が出る。

弦の長さを最初の3分の2にして鳴らすとソの音が出る。

弦の長さを最初の4分の3にして鳴らすとファの音が出る。

さらに……（以下省略）。

↑↑↑↑↑

ピタゴラス学派はこんな感じで、音階上の主要な音を出すための弦の長さに単純な比例関係があることを発見したのでした。

上のような単純な計算を繰り返すことで、僕たちがよく知っているほかの音も導き出すことができます。

これを「ピタゴラス音階」と言い、ルネサンス時代に至るまで西洋音楽におけるメジャーになっていたそうです。

ピタゴラス学派は数学に触れることが魂の浄化につながると考えたのでしたね。音楽に数学が隠れているとすれば、音楽もまた魂を浄化する手段となるはずです。

実際に「ピタゴラス学派の人たちは、魂の浄めのために音楽を用いた」という言い伝えがあります。

僕たちも素晴らしい音楽を聴いたときに魂が洗われるような感覚を味わうことがあるでしょう。ピタゴラス学派はその理由を音楽の持つ数学的構造に求めたのです。

これに関連して興味深い話があります。

ピタゴラス学派は音楽と数学的調和には深い関係があると考えていました。

おそらくそこから類推したのだと思いますが、彼らは「美しい数学的調和を保ちながら運行している天体は音楽を奏でているはずだ」と説いていたのです（天球の音楽）。

残念ながら人間の耳には聞こえない音楽だと言うのですが、星々が音楽を奏でているとは何ともロマンチックな発想です。

およそ2千年後に活躍し、惑星の軌道について大発見を成し遂げた天文学者ヨハネス・ケプラー（1571–1630）は、ピタゴラス学派に影響されてこれと同じことを言っています。

万物は数から成る

ピタゴラス学派によれば、美しい数学的な調和が宇宙の万物を貫いています。

それを彼らは「万物は数から成る」と表現しました。

はるか後世のガリレオ・ガリレイ（1564–1642）は「宇宙のすべては数学という言葉で書かれている」という名言を遺しましたが、それと同じことを言っているのでしょうか。

近代科学は物体の運動や質量を数値として計測し、数学を駆使しながらそれを方程式にまとめることで大発展しました。ガリレオはその象徴です。

確かに「宇宙には数学的構造が内在している」というのは事実です。その考えは近代人の専売特許ではなく、すでにピタゴラス学派が宣言していたことなのです。

宇宙のことを英語で「コスモス」と言うことがありますが、これはもともとギリシャ語で「秩序」を意味する言葉です。

ここには「宇宙は美しい秩序で貫かれている」という信念があるわけですね。

なお倫理の教科書などでは「ピタゴラスは数こそが万物のアルケーだと説いた」と書いてあるものもあります。これは少し解釈が難しいところです。

タレスの「万物はアルケーは水である」という言葉の中に「万物は水の中から生まれた」という意味合いがある可能性について言及しました（第1章）。

ピタゴラス学派の「数」についてもこれと同じように理解できると僕は考えています。

世界が存在する前からすでに数学的秩序は存在していて、その数学的秩序に従って世界が創造された。つまり世界は数学的秩序の中から生まれた……。

こう考えるなら、「世界を誕生させた根源的な原理として数学がある」と解釈してもよいでしょう。これが「数が万物のアルケーである」ということの意味です。

つまりアルケーと言っても、水や空気のような「素材」「材料」のようなものと考えると少しニュアンスが違うわけです。

ピタゴラス学派は「宇宙に数学的構造がある」という近代科学に通じる発想を持っていましたが、それだけではなく数というものにもっと神秘的な意味合いを認めていました。各数字のそれぞれについても、神聖なもの・神秘的なものと考えていたのです。例えば彼らは、さまざまな数を重要な物事の象徴として割り当てていたようです。「1は知性を表す」「4は正義を表す」「5は結婚を表す」等々です。

洋の東西を問わず伝統的に「**数秘術**」というものがあって、数字を神秘的なものとして占いなどに用いています。

数秘術そのものはピタゴラスよりさらに大昔からありますが、ピタゴラス学派の思想も現代に伝わる数秘術の源流の1つになっているのです。

地球説と地動説！

最後にピタゴラス学派の「地動説」について触れておきましょう。

大地が動いているという地動説は近世になってからガリレオが命がけで主張したのですが、実はそこで初めて登場した考え方だというわけではありません。古代にも地動説を主張する人たちはいたのです。

地動説を主張したことがハッキリと確認できるものとしては、ピタゴラス学派がその最初の事例であるとされています。

また「地球は丸い」という「地球＝球体説」が最初に確認できるのもピタゴラス学派です。

地動説についてはピタゴラス学派のフィロラオス（前470頃—前385頃）という人の著書に記されています。

フィロラオスはピタゴラスよりも100年くらい後の人であり有名なソクラテスとほぼ同世代ですが、かつてピタゴラスが活躍した南イタリアのクロトン出身です。

この人が門外不出だった学派（教団）内部の教えを初めて本にして発表したんですね。

この書によると宇宙の中心には「火」があります。これは太陽ではありません。

そしてその中心火の周囲を、大地・太陽・月・水星・金星・火星・木星・土星・恒星天が回っているということです。

恒星天というのは、たくさんの恒星（夜空に見える星々）が張りついている球のことです。太陽や他の惑星については、それらが単体で動いているのか、球のようなものに張りついて動いているのかは（断片からは）不明瞭です。

さて、ここまでだと天体は9つです。

しかしピタゴラス学派は10こそが神聖な数だと考えていましたので、もう1つどこかに天体があるはずだと考えました。

そこで中心火を挟んで大地の反対側に「**対地星**」というものと主張したのです。

間に中心火があって大地と同じような運行をしているために隠れてしまい、こちらからは観測できないというわけですね。

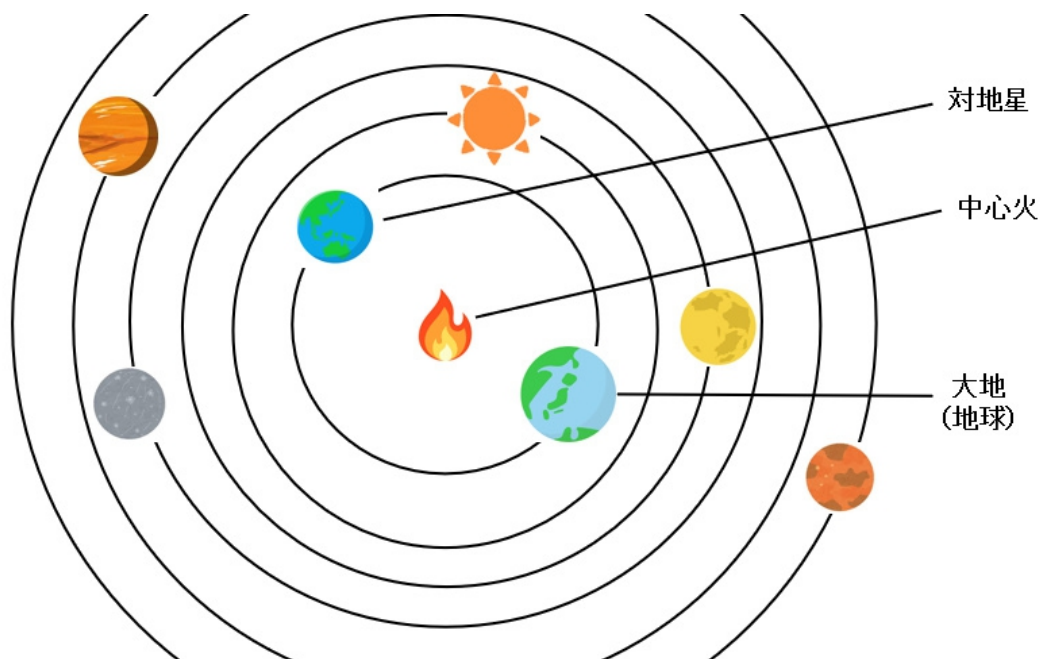


図4 ピタゴラス学派の宇宙像

この対地星については後世の思想家から「理論的なこだわり（10が神聖な数なのだ！）に合わせて事実を曲げている」と批判されました。確かにそうかもしれません。

ただ「地球にそっくりの双子星がある」という考えは人々の好奇心・想像力を刺激し、多くのSFやエンターテインメント作品の発想源ともなりました。

その後への影響

ピタゴラス学派でもう1人有名な人物としてアルキュタスがあります。こちらは南イタリアのタラスの人です。

世代的には先ほどのフィロラオスよりも少しだけ後の人ですね。数学者ですが政治家や軍人としても活躍しました。

有名なプラトンの友人として知られていて、プラトンがシケリア島で政治的危機に陥った際に彼の救出に尽力したと言われています。

アルキュタスは数学を用いて音楽・幾何学・機械学といった分野で重要な業績を遺しました。優れた数学者としてプラトンにも影響を与えたと考えられています。

さてピタゴラス学派は多くの点で後世に絶大な影響を及ぼしています。

① 人間の魂は永遠であり転生輪廻している。

② 宇宙は数（数学的秩序）が支配している。

とくにこの2つの発想はプラトンなどを經由しながら（肯定するにせよ否定するにせよ）その後の西洋思想に大きなモチーフ（主題）を提供しました。

数学・音楽・天文学の教養を学ぶことは西洋の知識人にとって必須になっていきますが、そこにもピタゴラスの影響があったはずです。

さらに数秘術のことなどを考えると、西洋思想の底流に流れつづける神秘主義の一翼を担っていたとも言えるでしょう。

西洋思想史上に占めるピタゴラスの重要性が分かります。

第4章 ヘラクレイトス

最初期の哲学者たち（ミレトス学派）を育んだイオニア地方でしたが、その後、ペルシャ帝国の支配下に置かれたことはすでに述べました。

それを契機として文化の西方伝播が起こり、イタリア半島やシケリア島において哲学の営みが始まることになったのです。ピタゴラスやクセノファネスがその象徴ですね。

しかしペルシャの支配圏に入ったイオニア地方でもギリシャ人思想家たちの活躍は続き、有名な思想家がそこから何人も登場しています。

イタリアとイオニア（現トルコ）がギリシャ思想の2大中心地として栄える時期がしばらく続くのです。

ソクラテス以前のこの時期、イタリアで発展したギリシャ哲学を（後述のエレア派を含めて）「**イタリア学派**」などと呼ぶことがあります。

それに対して、最初期のミレトス学派から始まり、その後にイオニア地方で発展したギリシャ哲学までを含めて「**イオニア学派**」と言うのです。

アルケーとしての「火」 ～ 万物流転 ～

さてそんな時代にイオニア地方で活躍した哲学者の1人がヘラクレイトス（前540頃誕生）です。

彼は難解な箴言（教訓的な短い言葉）で思想を遺した人物です。

クセノファネスやピタゴラスなどの先輩思想家を悪く言ったり、民衆たちへの軽蔑を露わにしたりしていることから、傲岸不遜な性格だったとイメージされています。

そういう理由からか「謎の人」「闇の人」というあだ名がつけられ、大昔から「闇の人」と言ったらヘラクレイトスのことだという共通了解ができていたようです。

ヘラクレイトスはミレトス学派の伝統を引き継いで「アルケー」（万物の根源）を彼なりに探究しています。

ヘラクレイトスがアルケーと見なしたのは「火」です。

この世界にある万物は火から出現し、そしてまた火へと還っていくというのです。

火は火のままであることもできますが、そこから水へと変化し、さらに水が土へと変化するという具合に変転してゆくこともできます。

こうしてできた幾種類かの素材によって世界の万物が成立しているというわけです。

この火から万物への移行をヘラクレイトスは「下り道」と表現しています。

これと反対の道をたどって万物が火へと還りゆくのが「上り道」だと言います。

こうして、火から万物へ（下り道）、万物から火へ（上り道）という風に循環しているのが世界の姿だとヘラクレイトスは説明するのです。

ヘラクレイトスの哲学を象徴するものとして「万物流転」（パンタ・レイ）という言葉がしばしば使われます。

これは上で説明したような循環的な世界観を指していると考えればよいでしょう。

現存しているヘラクレイトスの断片には「万物流転」というそのままの言葉は見られないようですが、それでも彼の思想の本質をよく表現していると思います。

同じ川に入れるか？

世界には変化して（一時的に）火ではなくなった素材もありますが、それでもこの世界は元なるものである火の本質的な特徴を保ったままです。

火というものはどんどん燃え去りますが、燃料を新たに炎に変えつづけることで、一見すると変化なく同じ大きさのまま存続します（ヘラクレイトスはそう考えました）。

これはすべての事物に当てはまると言います。変化がないように思える事物でも実はその裏で激しい変化が起きています。

ただ「変化して出ていく量」と「変化して入ってくる量」が均衡しているために安定して存続しているということです。

ヘラクレイトスは川の喩えでこのことを説明しています。

目の前にある川はさっきと同じ川ですが、そこを流れている水はさっきとは別の水であるはずで、中身の水はどんどん変わっているのに同じ川が流れつづけているのです。

彼は「我々は同じ川に入っていくのでもあり、入っていかないのでもある」と逆説的な言葉でこの考えを表現しています。

これは今考えても当たっている部分があります。

僕たちの身体を構成している細胞は日々入れ替わっていると言われていたよね。

すべてかどうかは知りませんが、人間のほとんどの器官や組織は1年以内にすっかり別の細胞になってしまっているそうです。

でもやはり僕たちの身体はずっと同じままであるように思えます。3カ月後に僕がタコのような姿になっているわけではありません。

激しい変化にもかかわらず……と言うよりむしろその激しい変化があつてこそ万物は安定的に存在しているのだと言えます。

なおヘラクレイトスは（例えば）水が土に変化することを「水が死んで土になる」「土は水の死を生きる」などと表現します。

あるものが死ぬことによって別のものが生きる。これはある意味で「戦争」です。この世界は戦争と対立によって変化し、その変化によって存続しているということです。

彼は「戦争はすべてのものの父、すべてのものの王」「争いは正道だ」と語っています。

でも変化を戦争になぞらえるのは彼の趣味であつて、とくにそうする必要があるとは思えません。「そう表現したいだけでしょ？」とツッコミを入れたくなります。

ヘラクレイトスが「闇の人」と言われたのも、おそらくこのあたりの感性がややネガティブだったからではないでしょうか。

1 なる世界とロゴス

ヘラクレイトスが説いたことでさらに重要なことが「世界は1つである」「ロゴスが世界を支配している」という思想です。

ロゴスとは世界や宇宙を支配する「摂理」「理法」「ことわり」というくらいの意味です。

ヘラクレイトスはこの「ロゴス」を初めて強調した哲学者だと評されているのです。

ヘラクレイトスの考えるロゴスとは、すでに述べた「火と万物との循環・流転」「対立物の抗争」「生成変化が支える安定」などのことでしょう。

これこそが世界のロゴス（摂理）だということです。

そしてロゴスという同じ摂理に支配されているという意味で、世界は1つなのです。

すでにピタゴラス学派が「秩序」（コスモス）を強調しており、ヘラクレイトスも「コスモス」という言葉を使っています。

しかしヘラクレイトスによれば、コスモスはその背後にある激しい生成変化が均衡している結果としてそのように見えるにすぎません。

ヘラクレイトスが「ロゴス」と言う場合、（秩序というニュアンスもあるかもしれませんが）ダイナミックな生成変化のほうを強く意識しているように思われるのです。

いずれにせよ、この「ロゴス」（摂理・理法・ことわり）という思考法はその後のギリシャ思想における大きなテーマになっていきます。

もちろん彼が「世界は生成変化する」と強調したことも後世に大きな影響を与えました。後の思想家たちはヘラクレイトスが提示したこれらのテーマを受け取り、それについて考察しなければならなくなるのです。

第5章 エレア学派

① パルメニデス

若きソクラテスを一蹴？

ヘラクレイトスはイオニア地方で活躍した思想家ですが、ギリシャ思想のもう1つの中心地であった南イタリアでも次なる世代が登場します。

それが「**エレア学派**」と呼ばれる一派です。パルメニデス（前515頃—前450頃）とその弟子たちのことです。

エレアは南イタリア西岸にあったギリシャ人たちの植民都市で、この地で活動したことからパルメニデスの一派は「エレア学派」の名が付されているわけです（図2）。

なおパルメニデスはすでに出てきたクセノファネスの弟子だったという説もありますが、思想もあまり似ていませんし「おそらく違うだろう」という意見が一般的です。

パルメニデスは「ソクラテス以前」の哲学者としてはかなりの大物で、かの有名なプラトンも彼に対しては一定の尊敬の念を抱いていたようです。

プラトンはこの先輩思想家の名を冠した『パルメニデス』という対話篇（複数の人物の対話という形式を採った作品）を書いています。

プラトンが書いた対話篇は数多くありますが、それらはプラトンの師ソクラテスが主人公として登場して「対話の相手を論破していく」というのが普通の展開です。

ところがこの『パルメニデス』だけは、若きソクラテスが老パルメニデスに論争を挑むものの瞬殺されてしまうという異例の展開になっているのです。

こういうところに、プラトンがパルメニデスをいかに重視していたのかが現れていると言えるでしょう。

もちろんプラトンは自身の師であったソクラテスについても「まだ若かったから」ということにして「立てて」はいますが。

この対決そのものはプラトンによる創作であろうというのが一般的な意見ですが、「もし本当だったら……」と心躍るエピソードですね。

中国でも「老子と孔子が出会っていた」という話がありますが、あんな感じでしょうか。

生成消滅を否定

パルメニデスは「女神によって真理が啓示された」という体裁の詩を著しています。しかしパルメニデスの言わんとしている内容を正確に把握するのはかなり難しいというのが正直なところです。

というのも彼の思想は抽象的ですし、そのうえ「詩」という形式のせいでさらに分かりにくいからです。そもそも古代ギリシャ語からして難しいし……。

そういうわけで研究者によって解釈が分かれるところがあるのは仕方ないと割り切って、本質的な部分を何とか抽出してみたいと思います。

以下の説明はパルメニデスの断片に見られる言葉を忠実に再現したものというより、「この順序で考えればそれらの断片を統一的に解釈できる」という僕なりの理解です。

いよいよ哲学らしい難解さが出てくる感じですが、ゆっくり考えながら読み進めれば、この解説も理解できるはずですので、頑張ってついてきてください。

まずパルメニデスは「ある」ということと「あらぬ」ということを峻別し、この2つを厳しく対置させます。

とりあえず「ある」は「存在する」ということだと理解しておいてください。「あらぬ」は「存在しない」ということです。

彼によれば「存在」と「非存在」はまったく相容れないものであって、互いに交わることはないのです。

まだピンと来ないかもしれませんが、彼が言わんとするのはこういうことです。

存在が非存在になったり、非存在が存在になったりすることはない！

存在が非存在になるというのは「消滅する」ということです。非存在が存在になるというのは「生成する」（誕生する）ということですね。

つまりパルメニデスによれば「何かが生まれたり消えたりすることはない」「生成消滅ということはありません」というのです。

え？　だって昨日あったリンゴは食べて無くなっちゃいましたけど……。

こういうツッコミが入りそうですが、それについてはまた後ほど考えましょう。

存在と述定

いきなりですが、英語のbe動詞は「A is」とだけあれば「Aが存在する」という意味、「A is B」とあれば「AはBである」というイコール（述定）を表す意味になりますよね。これはギリシャ語でも同じで、「ある」を意味する動詞（エスティ）には、「●●がある」という存在の意味と、「△△である」という述定の意味の2つがあります。

そしてどうもパルメニデスは存在と述定の両義性がある「ある」という言葉を（おそらく意図的に）ごっちゃにして使っていると思えるのです。

先ほど生成消滅を否定した際には「ある」という言葉を「存在する」という意味合いで使っていましたね。

ところが次にパルメニデスは「ある」をイコール（述定）の意味で用いて考察を進めます。この場合ならば「ある」は「△△である」ですし、「あらぬ」は「△△ではない」ということになります。

この場合でも「ある」と「あらぬ」は決して交わりません。両立しないのです。つまり「Aである」から「Aではない」になることはないし、「Aではない」から「Aである」になることもありません。

例えばある花が「赤である状態」から「赤ではない状態」になることはないということです。また子供が「身長1メートルである状態」から「身長1メートルではない状態」になることもありません。

つまり赤い花が青くなることはないし、小さな子供が大人になることもないのです。

要するにパルメニデスは何かが「変化する」ということを否定するのです。

先ほどの生成消滅もある意味で「変化」の1バージョンですが、彼によれば生成消滅だけではなく、「そもそも何かが変化すること自体が不可能である」というわけです。

世界は変化しない???

これについてもツッコミは少し我慢して後に回しましょう。

ただこの考え方が、万物流転を説いたヘラクレイトスの正反対であることはお分かりかと思えます。

後世の哲学者たちは、この2人の思想の狭間で揺れることになるのです。

「ある」と「あらぬ」は両立せず (by パルメニデス)

- 「ある」を存在として解釈 ⇒ 生成消滅の否定
 - ・ 「存在 → 非存在」、「非存在 → 存在」という変化はあり得ない。
- 「ある」を述定として解釈 ⇒ 変化全般の否定
 - ・ 「Aである → Aではない」、「Aではない → Aである」という変化はあり得ない。

図5 パルメニデスの思想

1 なるもの

パルメニデスは述定の意味での「ある」と「あらぬ」の思考法をさらに進め、どんどん常識外れの方角に向かいます。

何かある対象が（例えば）「猫である」ということは、それが「犬ではない」ということを内容として含んでいます。

これはある意味で同じ対象について「ある」（である）と「あらぬ」（ではない）が同居してしまっています。

普通なら、同じ対象について（「猫である」と「猫ではない」ことは両立しないにしても）「猫である」と「犬ではない」ことは両立すると考えるでしょう。

しかしパルメニデスは普通の考え方をする人ではありません。彼によれば、いかなる意味においても「ある」（である）と「あらぬ」（ではない）は同居できないのです。

それが仮に「猫である」と「犬ではない」であったとしてもです。

僕は自分が「人間である」と同時に「カエルではない」と信じていますが、パルメニデスによれば、それは間違っていることになります。

このように考えるとすれば、そもそも何かと別の何かを区別すること自体ができなくなりそうです。

AとBが違うものだとする、「Aである」ことは「Bではない」ことを含んでおり、「ある」（である）と「あらぬ」（ではない）がそこで同居してしまうことになるからです。

結局、パルメニデスはどんな世界を思い描いているのでしょうか？

それは「これ」「それ」「あれ」などと互いに識別・区別できるような存在が数多くあるという世界ではなく、「ただ1つのものが全体としてある」という世界でしょう。

パルメニデスの言葉として「あるものは不生不滅であり、全体としてあり、ただ一種のものであり（中略）一挙に全体として、1つのもの」というものが遺っています。

まとめると、パルメニデスの考える「ある」ものとは「生成変化しない」「内部にいかなる区別もない」「1なるもの」だということになります。

ロゴス（理性）と感覚の二元論

だいたいこれがパルメニデス哲学の内容ですが、普通の感覚からすれば「いったい何を言ってるんだ？」という感じではないでしょうか。

いくら「生成消滅などない」と言ったところで、子供は生まれてくるし老人は死んでいきます。「変化などない」と言ったところで、朝は昼になるし昼は夜になります。また「1なるものがあるだけだ」と言ったところで、この世界には多種多様な存在者たちが溢れかえっています。

こういうツッコミに対してどう回答するのか？

パルメニデスの考え方を極端化して分かりやすく言うと、次のようになると思われます。

↓↓↓↓↓↓

変化があるだと？ それは思い込み（ドクサ）だ！

本当は世界は変化などしておらん。

↑↑↑↑↑↑

思い込み!?

すごい開き直りとも思えますが、実はこれは彼のロゴス論と関わっています。

そこで最後にこの点について述べてみたいと思います。

ロゴスとは世界を支配する理法とか摂理のことです。すでにヘラクレイトスのところで出てきましたね。

しかし実はロゴスにはもう1つ意味があって、それは世界を支配する摂理であると同時に、その摂理を説明するのに用いる人間の「言葉」「理性」「理論」のことでもあるんです。

ロゴスという概念には「摂理」（世界そのものの真実）と「摂理を説明する言葉」（人間がこしらえるもの）という2つの意味があるわけです。

そしてパルメニデスは、自分が論じている「生成変化の否定」「区別の否定」はきちんとロゴスに従って考察した結果であり、確固たる真理だと確信しているのです。

ロゴスによって導かれた内容は、そのまま世界の真実であるはずだということです。

もし人間の感覚にとっては「多種多様で生成変化に富む世界」が現れるというなら、その感覚の方が間違っているというのがパルメニデスの発想なのです。

ロゴス（理性）によって捉えられるのは「真理」（アレーテイア）だが、感覚によって捉えられるのは「思い込み」（ドクサ）だと彼は言います。

感覚的な世界を「思い込み」（ドクサ）あるいは「仮の世界」と見なす西洋哲学の長い伝統が、このパルメニデスあたりから始まっているのです。

確かにパルメニデスは少し極端ですし、僕もそのまま支持することはできません。

しかしロゴス（理性）と感覚を峻別して前者を優位に置く「二元論」の発想そのものは、プラトンなどに受け継がれ、思わぬ形で西洋哲学に大きな実りをもたらしました。そのあたりのことはプラトンのところで取り上げましょう。

現代科学との類似性 ～ブロック宇宙論～

最後に、現代の一部の科学者の中から、パルメニデスを再評価する動きが出てきていることを付記しておきたいと思います。

最新の科学の世界では、宇宙に時間が流れている（＝変化がある）ことを否定する「**ブロック宇宙論**」という考え方が登場しているのです。

そしてブロック宇宙論者たちが、時間否定論の先駆者としてパルメニデスに言及することが増えているというわけです。

僕は専門外なので詳細は語れませんが、この説では「過去・現在・未来の『各瞬間の宇宙』がパネルのように連なっている」と考えます。

そして「各瞬間の宇宙」はそれぞれ静止画のようなもので変化がありません。そしてそれがズラッと並んでいるだけなので、宇宙には時間は流れていないということです。
言い換えると、過去は過ぎ去ったのではなくまだあるし、未来はこれから来るのではなく、もうあるというわけです。

過去や未来があるってどこにあるんだ？

そう聞かれても困りますが、おそらく4次元時空のどこかにあるのでしょう……。
過去や未来は現在とは異なる宇宙であるためアクセスはできず、現在の人が過去や未来の世界を見たりすることはできないとされています。

これは決していわゆる「トンデモ科学」というわけではなく、最先端科学を牽引する重要な科学者たちが真剣に取り上げている説です。
ただ「どうして人間は存在しないはずの時間の流れを感じるのか」など、まだまだ疑問点も多く、正しいと証明されたわけでもありません。

ブロック宇宙論の是非については今後の研究の進展を待つしかありませんが、最先端の科学が数千年前の哲学と重なってくるというのは、とても興味深いことですよね。

② （エレアの）ゼノン

広く知られる有名な議論を発明

エレアのゼノン（前490頃－前430頃）はパルメニデスの弟子です。

哲学史にはゼノンという名前の人が何人か出てくるので、「エレアのゼノン」と憶えないと間違えてしまうかもしれません。
ほかにはストア派の創始者、キティオンのゼノン（前335頃－前263頃）などがいます。

エレアのゼノンについては、独裁者への謀反を計画し、捕まって処刑されたという話が伝わっています。

ゼノンは先ほどご紹介したプラトンの対話篇『パルメニデス』にも登場します。
パルメニデスはソクラテスを論破する大物として描かれていますが、弟子のゼノンのほうは少し扱いが悪くて、自分より若いソクラテスにやっつけられてしまう役です。

しかしなかなかどうして、このゼノンの業績も哲学史においてはかなり重要なんです。

ゼノンという名前は知らなくても、彼が提出した「アキレウスと亀」という議論は多くの人が知っているのではないのでしょうか？

パルメニデスの思想は哲学史をきちんと学んだ人しか知らないでしょうが、ゼノンの「アキレウスと亀」は哲学という狭いジャンルを超えて広く知られているでしょう。

結局のところゼノンが何をやったのかと言えば、師パルメニデスの哲学を巧みな議論によって擁護したということです。

何しろ先生が「生成消滅はあり得ない」「運動はあり得ない」「世界には多数の事物はない」などと変なことばかり言うものだから、いろいろと批判も浴びていたのでしょう。

無限分割の問題

それに対してゼノンは「パルメニデスの説に反対する意見からは矛盾が生じる」ということを証明することによって対処しようとしていました。

このように「ある主張を証明するために、それに反対する主張からは矛盾が生じることを示す」という証明法を「**背理法**」と言います。

例えばゼノンはパルメニデスの説「存在するものは1つである」を証明するために、背理法で「存在するものが多数だとすると矛盾が生じる」ことを示そうと試みました。

これを「多数性論駁」（存在するものは多数であるという意見に反論する）と言います。

その多数性論駁を行う過程で、ゼノンは後世の思想家たちを悩ます1つの議論を提出しました。これは多数性論駁と切り離して、独立に扱うことができる議論です。

ゼノンはそこで次のようなことを言っています。

↓↓↓↓↓↓

存在するものがA、B、C……と複数個あるとする。

しかし（例えば）AとBが異なるのはそれを隔てる何か（Dとする）があるからだ。

ところでそのDはAともBとも違うのだから、AとDを隔てる何か（E）、DとBを隔てる何か（F）があることになる。

同じことは無限に考えられるのだから、結局のところ「存在するものは無限の数ある」ということになるだろう。

このように、存在物が複数だと仮定すると必然的に存在物は無限数となる。これは不条理であるから、存在物は複数だという仮定が間違っていたのだ。存在物は1つである。

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

ここでは「存在物が無限数あることは不条理だ」としていますが、別に不条理ではないという反論もあります。そのため、多数性論駁は失敗しているというのが一般的な評価です。

しかしそれよりも、ここで「**無限分割**」の問題が現れていることが重要です。つまり「存在するもの（例えば物質）は無限に小さく分割していけるのか」「それともそれ以上には分割できない最小単位のようなものがあるのか」という問題です。これは近現代になってもなお哲学者たちを悩ませつづけました。こうした問題を扱ったことが確認できる最初の例がゼノンの議論なのです。

現在では素粒子が物質の最小単位とされていますが、「素粒子はそれ以上には分割できないのか」と問われると分からないでしょう。これは今でも未解決問題なのです。しかし近年、ようやく1つの動きが出てきてはいるようです。

科学者たちは「相対性理論」と「量子論」を統合する理論を探究していますが、その候補となるものとして「**ループ量子重力理論**」というものが注目されています。同理論の説明によれば、時間には「プランク時間」、空間には「プランク長」という最小単位があります。それ以上には分割できないのです。

これもまだ1つの候補理論です。したがって完全に正しいのかは分かりませんが、数千年の哲学的議論に決着をつけることになるのか、要注目でしょう。なお哲学の歴史では、間もなく「それ以上には分割不可能な最小単位がある」と説く「原子論」という立場が出てきます（第6章③）。

アキレウスと亀

多数性論駁は、師バルメニデスの「存在するものは1つである」という説を裏づけようとしたものでした。

ゼノンはさらに師の「変化はあり得ない」という説も擁護しています。もっとも「変化」と言ってもその一種である「運動」についての議論ではありますが。

その1つが有名な「アキレウスと亀」のパラドックス（逆説）で、以下のようなものです。
数値などは分かりやすく僕が設定しています。

↓↓↓↓↓↓

足の速いアキレウスと足の遅い亀が競争するとしよう。アキレウスは亀の10倍の速さで走ることができる。

ただしハンデを与えてアキレウスは亀よりも100メートル後方からスタートする。

同時にスタートすると、アキレウスが亀のスタート地点に到達したときには亀は10メートル先に到達している。

その10メートル先にアキレウスが到達したら亀はその1メートル先に到達している。

その1メートル先にアキレウスが到達したら亀はその0.1メートル先に到達している。

その0.1メートル先にアキレウスが到達したときには……。 （以下続く）

このように亀はいつも少しだけアキレウスの先にいることになる。足の速いアキレウスはいつまでも亀に追いつけない。

足の速いアキレウスが遅い亀を追い抜くなどという、運動について我々が持つ〈常識〉は感覚がもたらすドクサ（思い込み）なのだ。

↑↑↑↑↑

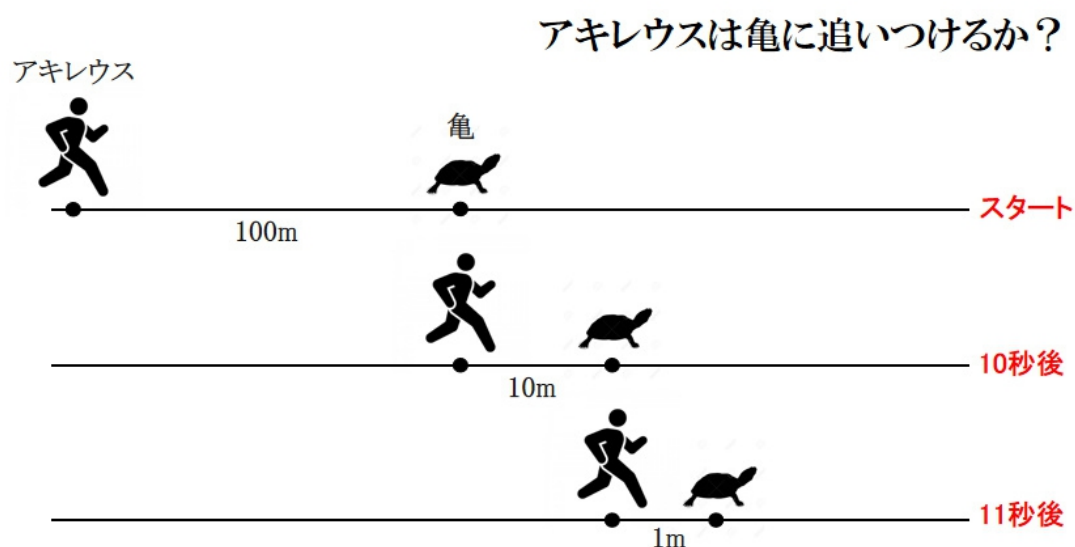


図6 アキレウスと亀

このパラドックスに対して数学を使って一般的に反論するとすればこうなります。

↓↓↓↓↓↓

スタート時の両者の距離の差は 100 メートル。

次のポイントでの両者の距離の差は 10 メートル。

その次のポイントでの両者の距離の差は 1 メートル。

その次は 0.1 メートル……。 (以下続く)

これらの数字を足し算していつて出てくる答えが、アキレウスが自分のスタート地点から亀を追い越すまでに走った距離である。

これを数式にすると「 $100\text{ m} + 10\text{ m} + 1\text{ m} + 0.1\text{ m} + \dots$ 」と表すことができる。そしてこの足し算を無限回繰り返すと、その答えは約 111.111……メートルとなる。

このことは、アキレウスがスタートした地点から 111 メートルと少しのところで亀に追いつくことを意味している。

アキレウスが亀に追いつく 1 地点は具体的に特定できるのだ。これを数学的には「無限等比級数が収束する」と言う。

昔の人だから仕方がないが、ゼノンはこの数学が分からなかったのであろう。

↑↑↑↑↑

理論と現実のバランス

常識的には妥当な反論だと思われるのですが、哲学者の中にはこういう常識的な反論に納得しない人もいます。

ゼノンの議論では「100m の次が 10m で、その次が 1m で、その次が 0.1m で……」というステップが無限に続いていつまでも終わらないと想定していました。

しかし数学を使った反論では「この足し算を無限に繰り返すと……この値になります！」というふうに、無限回の足し算が完了することを勝手に前提してしまっています。

ゼノンはまさにこの点を問題にしたのであって、「勝手に無限回のステップを完遂できることにしちゃっていいのか」というのが問題の本質だということです。

実際にアキレウスは亀を追い越すだろうが！ お前には眼がついとらんのか!?

こういう反論が聞こえてきそうですが、エレア派はそんなことでは動じません。
彼らは「感覚で世界がどのように見えようと知ったことではない」と答えるでしょう。

彼らの必殺技である「感覚は関係ない理論」です。
現実にはアキレウスは亀を追い越すというのなら、その現実が間違っているのだ。正しいのは我々のロゴス（理論）なのだから。
こう来るともうお手あげですね……。

僕としては、まず現実世界のありさまを受け入れてそれを説明するのがロゴスだろうと考えるので、ゼノンの議論はやはり極端に感じられます。

しかしそう思う一方、現代科学では「パラレルワールド」（並行世界）やら「他次元世界」やら人間の感覚ではまったく捉えられない世界を扱ってもあります。
時間推移は錯覚だとする前述のブロック宇宙論と言い、人間にとってどう見えるかよりも理論的な整合性を重視する立場も確かにあるわけですね。

また少し話が飛びますが、倫理の領域などでは「現実がこうだから」という理由で是非善悪を論じるのが正しいとは限らないでしょう。
例えば「現実にはみんなコンビニ傘を盗んでいるから」という理由で、一般的に窃盗行為が正当化されることはありません。

したがってエレア派は極端に感じられるとしても、一般論として「理論と現実のバランス」はなかなか難しい問題を含んでいると思います。

飛ぶ矢は飛ばない？

それでは、ゼノンの議論をもう1つご紹介しておきます。
こちらもそれなりに有名かもしれません。

さっきの「アキレウスと亀」は運動を否定するために編み出したものでしたが、よく考えてみれば「運動はしているが、その運動は完遂しない」という内容でした。
だから「なんだ、運動はしてるじゃん」と言われたら困るわけです。

そういうわけでゼノンは運動そのものが不可能であることを論証しようと試みています。
それが「矢」の議論です。

↓↓↓↓↓↓

矢が飛んでいる（ように思える）とする。

しかしその矢は、どの瞬間をとってみてもまさにその瞬間においては静止しているはずである（写真で撮られた1コマみたいなもの）。

どの時点でもまさにその瞬間は静止しているならば、矢はいつも静止しているのである。
したがって矢は動かずに静止している。

↑↑↑↑↑

いやいや、実際に矢は飛んで移動するだろうが！……という現実論がエレア派に通じないのはすでに述べた通りです。

一応、理屈で反論を考えてみなければなりません。

ブロック宇宙論との絡み

ここでゼノンは時間の流れ（と一般的に思われているもの）を「断片的（非連続）な各瞬間の連なり」と想定しているようですが、この点を批判することはできそうです。

はるか後世の哲学者ベルクソンが主張していることですが、時間とは区切りを入れて断片化できるようなものではなく「持続的な流れ」なのだと考えるのです。

切れ目なく流れているのが時間なのだとすれば、そこには「矢が静止しているような瞬間」というものはないことになります。

これだとゼノンの議論は成り立ちませんよね。

ところが、ここでパルメニデスのところで触れたブロック宇宙論との絡みが出てきます。
断片的なコマ切れの各瞬間（各世界）が連なっているというのがブロック宇宙論ですから、これが正しいなら、むしろゼノンの議論を補強してくれるものなのかもしれません。

しかしゼノン（あるいはブロック宇宙論）のように時間の流れを「断片的瞬間の連続」と見なした場合でも、次のような反論ができそうな気はします。

↓↓↓↓↓↓

確かに各瞬間を切り出すならば、各瞬間での矢は静止している。しかし各瞬間は（映画フィルムのコマのように）次々と切り替わっていく。

この切り替わりこそが時間の流れだ。切り替わりによって矢はどんどん場所を変えていくだろう。これが運動なのだ。だからやはり矢は飛んでいる。

↑↑↑↑↑

この反論に対して現代のブロック宇宙論からの再反論もあるのですが、それは（少なくとも今のところ）うまくいっているとは思えないのです。

彼らの一部は「時間の流れは人間の脳の活動が生み出す錯覚だろう」とも言っていますが、脳活動も時間の中で行われるはずですから、彼らの議論は循環している気がします。

まだ曖昧なところが多く、洗練されていない印象を受けます。

そんなわけで、僕たちとしては、ブロック宇宙論が正しいかどうかに関わりなく、何らかの意味で「時間は流れている」と考えてよいのではないのでしょうか？

いずれにせよ、ゼノンのパラドックスにまともに回答しようとするとなかなか大変であることはお分かりいただけたでしょう。

高等数学を知らなかった古代人のたわごとというわけではないと思います。

ほかにもゼノンが提出したパラドックスはありますが、この辺でやめておきましょう。

これらのパラドックスは後の哲学者や科学者をいたく刺激し、その解釈や解決法をめぐって盛んに議論が交わされました。

そしてそれは今も続いています。2千年以上も論争が尽きないような問題を提出したゼノンは、やはり哲学史において異彩を放っていると言えるでしょう。

メリッソス

最後にメリッソスという人物について少し触れておきます。

彼はパルメニデスの熱烈な支持者で、正確なところは不明ですがおそらくゼノンと同世代の人だったと考えられています。

しかしメリッソスはパルメニデスやゼノンが活動した南イタリアのエレアではなく、イオニア地方のサモス島の人です（図3）。これはピタゴラスの出身地ですね。

彼はサモス軍の艦隊の司令官として活躍しアテナイ軍を破ったとも言われています。この頃の哲学者は政治家や軍人を兼ねていることが多くて驚きます。

メリッソスはパルメニデスの議論を（パルメニデス本人が言ったかどうか分からないことも含めて）さらに詳しく展開して整理しました。

彼によれば「存在するもの」は1つであり、始まりも終わりもない永遠不滅のものです。そして空間的にも無限大であると言います。さらにそれは不変であり不動であり分割することは不可能です。

こんな感じでメリッソスは（彼自身はエレア派とは言えないでしょうが）エレア派の議論を整理して後世に伝えました。

彼の仕事が次世代のレウキッポスやデモクリトスなどの原子論者たち（第6章③）に一定の影響を与えたと言われています。

第6章 多元論

① エンペドクレス

多元論とは

次に「**多元論**」という思想を扱いたいと思います。

これはある意味で、ヘラクレイトスの「生成変化」とパルメニデスの「生成変化の否定」を調和させようとする試みだと見なせます。

ここでの多元論とは「永遠不滅で変化しないものを**多数**認めて、それらの離合集散によって世界の変化や多様性を説明しようとする理論」だとまとめられるでしょう。

すぐに述べるように多元論もいろいろですが、共通するところをまとめると以下のようになりそうです。

↓↓↓↓↓↓

本当に存在するのは（パルメニデスが言うように）「変化しないもの」である。それには始まりも終わりもなく永遠不滅である。

ところでそれは多数あるのだ。それらは世界の素材であって、それらが離合集散することによって（ヘラクレイトスが説いたような）多様で変化に富んだ現象世界が現われる。

素材となる存在についてはパルメニデスが正しく、それらの集合である世界についてはヘラクレイトスが正しい。

↑↑↑↑↑↑

だいたいこんな感じでしょうか。

もっとも「存在するものは多数ある」と言っている時点で「存在とは、区別や識別を受けつけない1つの全体だ」というパルメニデス説とは袂を分かっています。

思想の歴史とは「先行者たちの思想のあるものは受け入れ、あるものは捨てていく」という過程ですので、こういうことはよくありますね。

神秘的な人物像

エンペドクレス（前 492 頃—前 432 頃）はシケリア（シチリア）島南岸のアクラガスという都市で生まれました。

シケリア島なので、イタリアとイオニアというギリシャ思想の 2 大中心地のうち前者の圏内に属しますね（図 2）。

貴族の家柄であり政治家もやっていて、アクラガスの民主政において大きな役割を果たしていたそうです。さらに医者でもありました。

それだけではありません。エンペドクレスはかつてピタゴラスがそうだったように、哲学者と宗教家を同時に兼ねたような人物でした。

宗教家としての側面は重要で、彼の語る予言や託宣（神のお告げ）を聞こうと、多くの市民たちが彼につき従ったと言われています。

エンペドクレスの死についても伝説があって、彼はアイトナ（エトナ）山の火口に身を投げて亡くなりますが、火口から青銅の靴が投げ返されてきたと伝えられています。

僕は（多くの証拠から合理的に推論して）超常現象なんかの存在も信じていますが、さすがにこの話はちょっと信じられません。

4 根説と「愛」「憎」

それでは思想の中身について。

エンペドクレスは宇宙の万物は「火」「土」「空気」「水」という 4 つの要素が組み合わさることによってできると考えました。

彼はこれを万物の 4 つの「根」（リゾーマタ）と呼んでおり、ここからエンペドクレスの説をよく「4 根説」と呼びます（4 元素説と書いてあるものもあります）。

先行する哲学者たちもアルケー（万物の根源）としてさまざまな要素を挙げていましたが、エンペドクレスはそれらを 4 つに整理したわけです。

この 4 根説はプラトンやアリストテレスにも受け継がれ、さらに中世の医学や錬金術の基礎理論になるなど、歴史的に絶大な影響を及ぼすことになります。

本講座は哲学だけに限定していて、医学・錬金術・占星術などは対象外ですが、それらも含めた思想史全体を考えるなら、4 根説の影響力はすさまじいものでした。

この4根こそがパルメニデスの言う「生成変化しない永遠不滅のもの」に当たります。これらがさまざまな比率で混合することで動植物や自然物ができてくるというのです。例えば、土・水・火の3つが「1：1：2」の割合で混合すると「骨」という物質が形成されるという具合です。こういう風にエンペドクレスは4根の混合の比率によって万象万物の多様性を説明しようとした。そして4根が分離するとその事物は解体されるのです。

ではどうして4根が混合したり分離したりするのか？

これを説明するために出てくるのが「愛」と「憎」（争い）という2つの原理です。

愛とは諸要素を結合させる引力であり、憎（争い）とはこれらを分離させる斥力です。

永遠不変な4つの「根」があり、それらが「愛」（引力）と「憎」（斥力）によって混合したり分離したりすることにさまざまな事物が生成し消滅していく……。

エンペドクレスはこういう世界を描いたわけです。変化するもの（ヘラクレイトス）と不変なもの（パルメニデス）とを彼なりに融合した思想だと言えるでしょう。

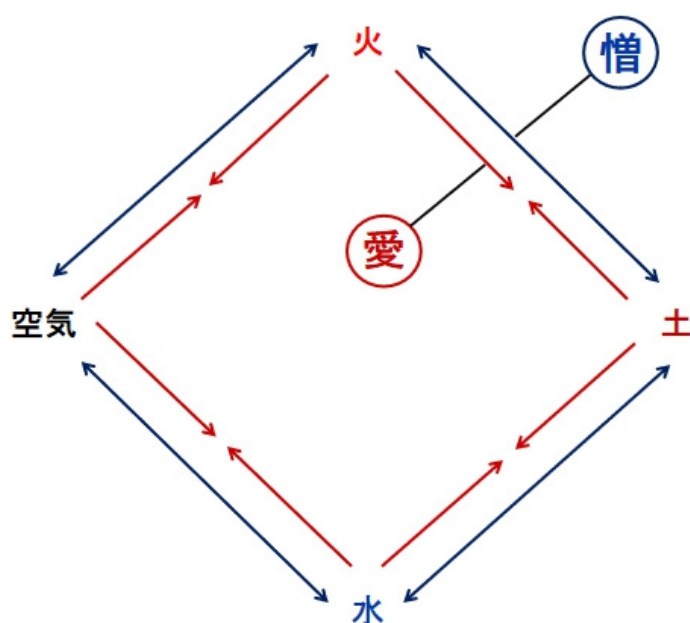


図7 エンペドクレスの4根説

周期的宇宙論

エンペドクレス曰く、宇宙には愛が強い時期と憎が強い時期があります。愛と憎の力の増減によって宇宙は周期的に変化してゆくというのです。

- ① 愛が最も強い時期（憎が最も弱い時期）
- ② 移行期 [① → ③]
- ③ 憎が最も強い時期（愛が最も弱い時期）
- ④ 移行期 [③ → ①]

①の愛が最も強い時期では、4根が結合して1つとなり宇宙全体は丸い球体のようになっています。このとき、憎は球体（宇宙）の外延部に追いやられています。

しかし②の移行期では憎が球体（宇宙）へ侵入し、4根は分離を始めます。

③の憎が最も強い時期では、憎が球体の中心を占めるようになり愛が外延部へ追いやられます。4根は完全に分離してバラバラになります。

それでも再び愛が球体の中へ入っていく④の移行期が訪れます。

宇宙はこの周期を永遠に繰り返すのです。

なお動植物や自然物などの事物というのは4根がさまざまな比率で配合されたものです。したがってこれらの具体的事物は、4根が完全に融合して1つになってしまっている①や、反対に完全に分離してしまっている③では無くなっています。

多種多様な諸事物は移行期にだけ生成することになります。

ちなみに愛が次第に増進していく④に諸事物が形成されるのは確かですが、憎が増進していく②でもそうなのかは研究者の間でも解釈が分かれているようです。

ダイモーンたちの転生輪廻

以上がエンペドクレスの哲学的宇宙論ですが、一方『カタルモイ』（浄め）という書物ではもう少し宗教的な世界観も覗かせています。

そこで語られるのは、オルフェウス教（そしてピタゴラス）の影響を受けたであろう「転生輪廻」の思想です。「**ダイモーン**」と呼ばれる神霊たちの転生の運命が描かれます。

ダイモーン（神霊）というのは「神とまで言えるかは分からないが人間よりは強力で、人間たちの運命を左右する霊的存在」というくらいに理解してください。

時代や人によって少しずつ意味が変遷していますが、これは「デーモン」（悪魔）の語源になった言葉です。

古代ギリシャの時代はとくに善悪に関係なく神霊をダイモーンと呼んでいたのですが、途中から悪いほうの霊に限定して言うようになったのですね。

それはともかく『カタルモイ』の内容はこんな感じです。

↓↓↓↓↓↓

かつて愛の女神だけが支配する理想的な時代があった。

ところが憎（争）の原理を信じるダイモーンたちが現れるようになった。

彼らは他のダイモーンたちから切り離され、4根による生成変化の世界に堕ち、そこで長い転生輪廻を繰り返すことになった。

しかし彼らも善き意志を持ち、清浄なる宗教生活を送るなら、やがて神性を回復して元の状態に戻れるであろう。

↑↑↑↑↑

このダイモーンたちの物語と上で述べた周期的宇宙論とがうまく両立するのか（矛盾していないか）については専門家の解釈も分かれるようです。

似ているところもありますが、ダイモーンの転生過程を宇宙周期に厳密に対応させようとすると難しいところもあるように思えます。

もしかしたら同じエンペドクレスでも違う時期に書かれたものかもしれませんし、あまり整合性にこだわっても仕方ないでしょう。

ちなみにエンペドクレスは彼自身がこの物語で言うところの「堕ちたダイモーン」だと考えていたようです。

最古の認知科学（認識論）

さらにエンペドクレスは人間の知覚とか感覚のメカニズムについても論じています。

現代なら「**認知科学**」と呼ばれるような分野です。

エンペドクレス曰く、対象からは「流出体」が発されており、これと感覚器官の「通孔」が適合すると感覚や知覚が成立します。

流出体と通孔とが適合するのは、両者の4根が類似しているからであるとも言います。

ちょっと分かりにくいので、僕が「こういうことなのかな」ということを書いてみます。
エンペドクレスの断片に出てくるものではなく、事例は僕の創作です。

↓↓↓↓↓↓

あなたがリンゴを見ているとする。

リンゴからは流出体（現代人ならリンゴから反射した光と考えるもの）が出ている。

この流出体の4根の比率は「土1：水2：火1：空気1」である（⇐ **適当です**）。

そして人間の眼（にある微細な穴）も4根が同じ比率で配合されてできている。

だからリンゴからの流出体と眼とが適合し、ここで視覚が生じるのだ。

↑↑↑↑↑↑

多分こんなことを言っているのでしょう。

この知覚論は後の原子論者たちにも影響を与えていると思います。彼らもこれに少し似た感じのことを書いているのです。

また現代人は思考は脳で行っていると考えていますが、エンペドクレスは思考の中樞は心臓だと述べています。これはアリストテレスに引き継がれた考え方です。

アリストテレスは現代の科学者たちから「心臓で思考していると考えたダメな古代人」みたいな言われ方をしていますが、もとはと言えばエンペドクレス説なんですね。

このようにエンペドクレスは先行哲学者たちの説を融合するところから出発し、結果的に後世に大きな影響を与える独自理論（4根説など）を生み出した思想家だったのです。

② アナクサゴラス

アテナイの文化的興隆

多元論に分類される次の思想家はアナクサゴラス（前500頃—前428頃）です。彼はイオニア地方のクラゾメナイという都市の生まれです。

彼の生涯で重要なのは前456年頃にギリシャ本土のアテナイに来て、そこで20年くらい研究をしていることです（最後は不敬神の罪で訴追されて同地を去っています）。

それまでギリシャ文化の2大中心地はイオニア地方と南イタリア地方でしたが、次第に文化は拡散し、それ以外の地方でも学問が盛んになってゆきました。

とくに紀元前5世紀前半にペルシャ帝国の侵略を退けた都市国家アテナイは国力を増進させ、同じ世紀の半ばには文化の新たな中心地になりつつあったのです。

イオニア地方からアテナイへ移ったアナクサゴラスはその象徴です。

また同じ時期には他の都市からやって来たプロタゴラスやゴルギアスなどの「ソフィスト」も活躍していました（第Ⅱ部「ソクラテスとプラトン」で扱う予定）。

有名な歴史家ヘロドトスもこの時期にイオニア地方からアテナイに移った人です。ここがさまざまな地域の人々を惹きつける文化交流地となっていたことが分かるでしょう。



図8 アテナイの文化興隆（前5世紀半ば）

すべてのものがすべての部分を分け持つ

アナクサゴラスの哲学はちょっと独特ですが、何とか分かりやすく説明してみましょう。

アナクサゴラスもエンペドクレスのように世界は多くの要素からできていると考えます。エンペドクレスが挙げていた4根に加え、アナクサゴラスは「湿」「乾」「熱」「冷」「明」「暗」「雲」「石」「髪」「肉」などの要素を挙げています。

したがって彼もまた「多元論者」であると言えるでしょう。これらの基本的な要素が組み合わさることによってさらに複雑な動植物や自然物が形成されます。

しかし面白いことに、これらの基本的な要素は（金以外の不純物を取り去った純金のように）それだけを単独で分離して抽出することはできないとアナクサゴラスは言うのです。

例えば「石」という要素があるとします。

それは確かに石ですが、土・水・空気・湿・乾・熱・冷・明・暗・雲・髪・肉といった他の要素がすべて部分（モイラ）として含まれているのです。

石が石であるのは、そこに含まれているたくさんの要素のうちで石の部分（モイラ）の割合が最大であるからです。

例えば石の部分が80%、それ以外の部分は2%ずつという比率であれば、それは石になるというわけですね。

じゃあその80%の部分だけを抽出してみたら純粋な石なのかと言えばそうではなくて、そこにもやはり同じような比率で他の要素が含まれているのです。

これはいくら繰り返しても同じことで、どこまで分解していても純粋な石にたどり着くことはできないと言います。

こういう構造を指してアナクサゴラスは「すべてのものがすべての部分を分け持つ」と表現したのです。

種子（スペルマ）とは

ところで倫理の教科書などを読むと「アナクサゴラスは種子（スペルマ）こそが世界のアルケーだと述べた」と書いてあります。

でもそれだけで終わっていたりするので、何のことだかよく分かりません。

この種子（スペルマ）とは何かということについてはいろいろな解釈がなされています。

1つには「万物を構成する微粒子のようなもの」という解釈があります。

しかし上で見たようにアナクサゴラスは「事物をどこまで分割しても純粋な要素を取り出すことはできない」と考えています。

つまり「無限分割が可能だ」と考えているように思えるわけです。エレア派のゼノンのところで出てきた問題ですね。

この無限分割の考え方と微粒子説とは折り合いが悪いように感じます。微粒子というのは、それ以上に分割できない最小単位のようなものでしょうから。

したがって微粒子説は少し無理があるように思うのです。

もう1つの解釈としてはアナクサゴラスの言う「種子」を「生物のもと」だと見なす考え方があります。

植物なら種子や胞子ですし、人間のような動物なら精液ですね。「種子」（スペルマ）という言葉には精液という意味があるので、これは文字通りの解釈です。

アナクサゴラスの言葉の中で、すでに挙げた他の基本要素と並べて種子を語っている箇所があります。

つまり種子とは万物を構成する粒子ではなく生物のもとになる材質のようなものであって、あくまでほかにもいろいろある基本要素の一種にすぎないということです。

種子にも「すべてのものがすべての部分を分け持つ」という大原則は当てはまります。種子には石・肉・髪・熱・冷その他の要素が少量ずつ含まれているのです。

種子はもともと持っていた要素を土台にしながら、外部から栄養分として必要な要素を吸収してそれらを加えることで徐々に成体（大人）になってゆきます。

僕はこちらの解釈のほうがスッキリしてよいと思っています。

したがって種子だけを特別視して「アナクサゴラスは種子を万物のアルケー（根源）と見なした」という哲学や倫理のテキストには修正が要るかもしれません。

すべてを動かす「ヌース」（知性）

さて次にアナクサゴラスの宇宙論を説明しましょう。

↓↓↓↓↓↓

原初の世界は前述したあらゆる要素が一緒くたになっていて混淆状態にあった。

これがやがて渦巻き状の回転運動（渦動）を始める。これによって混合していた諸要素が分離され、同じ要素が結合することで識別可能な素材となってゆく。

熱くて軽くて乾いていて希薄なものは、渦動軸の上方へ集まりながら周辺部へ飛散する。
冷たくて重くて湿っていて濃密なものは、渦動軸の中心の下方へ集まりながら大地を形成していく。

そうしてできた大地からは生命体が出現する。そして大地から分離された石は回転によって飛ばされて天体となる。

↑ ↑ ↑ ↑ ↑ ↑

そして「世界にこの最初の渦動運動を与えるのが『ヌース』（知性）なのだ」とアナクサゴラスは説きます。

彼の説明する「ヌース」とは「無限であり、他の要素とは交わらず独立しており、すべての知識を持っていて最大の力を有している」ものです。

世界に最初の運動を与えた後もあらゆる運動を支配し、それを把握して（知って）います。どんな事物がどんな要素から形成されているか、それを世界の全事物について知っていますし、現在だけではなく過去や未来についても同じように掌握しているのです。

要するに「全知全能の神」のような宇宙的知性のことですね。

ヌースとロゴス

少し脱線を……。

ここで「ヌース」という概念が登場しましたが、これは今後、神や人間の知的能力を表す哲学用語としてよく出てきます。

そしてすでに出てきた「ロゴス」という言葉も、同じような意味でよく使われます。

どちらも日本語ではよく「理性」「知性」「智慧」などと訳されます。要するに類義語であるわけですね。

ただ一般的な話としては、それほど神経質に区別する必要はありません。

ニュアンスとか語感の違いはあるので、思想家たちがそれぞれ自分でじっくり来る表現を使っているだけです。

例外として（アリストテレスなど）1人の思想家が2つを意識して使い分けていることがあるので、その場合だけはその思想家限定の用語法として区別する必要があります。

アナクサゴラスの「ヌース」に話を戻すと、過去の哲学者たちが「ロゴス」（摂理）と呼んだものよりも意識や意志を持つものというニュアンスが強調されています。

つまりキリスト教などが説く「神」に近い概念になっていると言えるでしょう。摂理や理法というと非人格的なイメージですが、それを超えた意味内容を含んでいます。

意志を持つ一神教の神に近い意味を持つようになった「ヌース」概念は（新プラトン主義など）後世に大きな影響を及ぼしました。

アポロニアのディオゲネス

このアナクサゴラス思想に影響を受けた人物としてアポロニアのディオゲネス（前 460 頃生誕）という哲学者がいます。

アポロニアは黒海西岸にあったギリシャ人都市で、現在はブルガリア共和国に属するソゾポルという町になっています。

ディオゲネスという有名人はほかにもいるので「アポロニアのディオゲネス」とセットにして区別します。

このディオゲネスもアナクサゴラスと同じくアテナイを訪れています。

彼の基本的な考えはミレトス学派のアナクシメネスを土台にして築かれています。

アナクシメネスは万物のアルケーを「空気」だと述べました。そしてその空気の濃密化・希薄化によってあらゆるものが生成すると論じたのでした。

アポロニアのディオゲネスも同じです。彼もまた「すべては空気から成り、やがて空気へと帰っていく」と説きます。その原理もやはり濃密化と希薄化です。

しかしディオゲネスが独特なのは「空気が思考する」と論じたところです。空気は思考によって万物を舵取り支配しているというのです。

そしてこの部分はむしろアナクサゴラスの「ヌース」に接近していると言えます。

アナクサゴラスのヌースもディオゲネスの空気も、あらゆる存在と現象を司る知性的存在だからです。

ただアナクサゴラスのヌースがあらゆる物質的要素から独立していると考えられていたのに対し、ディオゲネスは物質である空気に知性を組み込んでいる点が異なります。

③ デモクリトスの原子論

レウキッポスとデモクリトス

さて多元論のトリを飾るのは、いわゆる「**原子論**」です。

現代科学では「物質は小さな粒子からできている」と考えられていますから、僕たちの物質観にかなり近い考え方がここで登場したことになります。

原子論はレウキッポスとその弟子であるデモクリトスによって整備された理論です。

原子論の創始者とされるレウキッポスですが、生没年や出身地もはっきりせず詳しいことはほとんど分かっていません。

後世の原子論者でさえ彼の存在を否定したと言われています。気の毒……。

むしろ弟子のデモクリトス（前 460 頃—前 370 頃）のほうがはるかに有名ですね。

こちらでも著作の多くが失われてはいるのですが、それでも断片や後世の証言がけっこう残っている所以で本人の思想を再現することができるのです。

したがって以下で紹介するのはほぼデモクリトスの思想だと思ってください。

彼はソクラテスより年下でしたが、思想内容からして初期ギリシャ哲学の潮流に属していることから哲学史ではソクラテスよりも前に扱われるのが慣例となっています。

デモクリトスはトラキア地方のアブデラという町の出身です。

トラキア地方というのはバルカン半島南東部の歴史的地名で、現在のギリシャ北東部・ブルガリア南東部・トルコ（のヨーロッパ側）にまたがる地域です（図 8）。

現在、アブデラはギリシャ共和国に属している町です。少し年上ですが有名ソフィストのプロタゴラス（第Ⅱ部で解説予定）もこの出身です。

余談ですが、近年はトラキアで黄金製品の発掘が続いており、同地で約 7 千年前から黄金文明が栄えていたことが明らかになりつつあります。

僕たちが学校で習った、インダス・中国・メソポタミア・エジプトが「世界 4 大文明」だという理解はすでに時代遅れですね。

この時期（前 5 世紀の中頃）にはもうイオニア地方や南イタリアだけではなく、ギリシャ人が住むたくさんの都市で文化レベルが上がっていたことがうかがえます。

分割できないもの（アトマ）

原子論者たちはエレア派が「真に存在するもの」の特徴だと考えたもののうち「不生不滅であること」「分割できないこと」を受け入れました。
もっとも「1つであること」「不動であること」などはスルーです。

そしてこの真に存在するものを「**アトマ**」（分割できないもの）と呼んだのです。これが英語の「**アトム**」（原子）の語源ですね。

この「アトマ」（以下、原子と言います）はそれ自体としては不生不滅です。
目に見えないほど小さくて硬く、無限に多くあります。これらが離合集散することによってあらゆる事物が成立しているというわけです。

しかし多くの原子はみんな無個性であるというわけではなく、「形状」と「大きさ」において違いがあると想定していたようです。
またそれらの「向き」や「並び方」がどうであるかによって、形成される事物の性質が変わってくるといいます。

この「最小単位となる粒子にいくつか種類があり、それらの結合の仕方によってそこから形成されるものの性質が変わってくる」という考えは現代科学とほぼ変わりません。
十分な実験もできなかったであろうこの時代に、抽象的な思考だけでそこに到達したのはある意味で驚くべきことではないでしょうか。

さてデモクリトスたちは原子と原子の間には「**空虚**」（**ケノン**）があると考えていました。
原子と原子が集まると言っても、完全にくっついてしまうのではなく少しだけ間が空いていると考えていたようなのです。
エレア派に言わせるならば「空虚」は「あらぬもの」ですから、そんなものはあり得ないことになるでしょう。
それに対してデモクリトスは「あらぬものもあるものと同じようにあるのだ」と答えています。こうなるとほとんど禅問答ですね。

まあ表現はどうでもいいと思いますが、要するにエレア派（およびその後継者であるメリッソス）の見解を否定しているわけですね。
この空虚というものがなければ多くの原子が運動する場所もないことになってしまいますから、これは理論上どうしても必要になるものです。

機械論と目的論

原子が離合集散することによって多様な事物や現象が現れるとデモクリトスは言いますが、その原子の運動とはどのようなものなのでしょうか？

現代人に分かりやすく言うなら、それはパチンコ玉やビリヤード球の運動と似ています。ビリヤード球は外から突かれたり他の球とぶつかったりすることで動きますが、原子もそれとほとんど同じなのです。

ふ〜ん、普通だね……と思うかもしれませんが、この考え方はけっこう重要なんです。というのも、その後の哲学や科学の分野ではこれと対照的な運動理論が長く支配することになるからです。

それは少し後輩の思想家**アリストテレス**（前 384－前 322）に代表される「**目的論**」（**テレオロジー**）と呼ばれるものです。ここで解説しておきましょう。

目的論によれば、世界のあらゆる物事や現象には「目的」が宿っています。

チューリップの球根には「チューリップの花を咲かせる」という目的が宿っています。そして（ここが現代人の考えと異なる部分ですが）球根の内側にあるその目的が原因となって、ムクムクと球根を成長・発芽させるというのです。

目的とは、生物などに作用して運動や成長を促す実際上のエネルギーなのですね。

人間の胎児やニワトリの卵でも同じことです。

そしてさらにアリストテレスは、この目的論を無生物である物体の運動にも当てはめて考えたのです。

目的論によると「物質とか物体にも『こうあるべし』という目的（本質と言ってもよい）が宿っていて、それがその物体を動かす」というのです。

↓↓↓↓↓↓

石や土などは「下方にあるべし」「直線運動をすべし」という目的（本質）を宿している。だから石や土はまっすぐ下方に落ちるが、大地にそれを遮られて止まっている……。天体は「上方にあるべし」「円運動をすべし」という目的（本質）を持っているから、天空で円運動をしている……等々。

↑↑↑↑↑

これをまとめると「内から」「未来から」の運動理論と言えるでしょう。

物体の内側に目的（本質）という不思議なエネルギーが宿っていて、それが物体を突き動かすわけです。それは「未来にはかくあるべし」という理想像・青写真でもあります。

物体は自らの未来の姿に引き寄せられ、それを実現するのです。

喩えるなら、目標物に向かうように内部設定されている誘導ミサイルのようなイメージでしょうか。

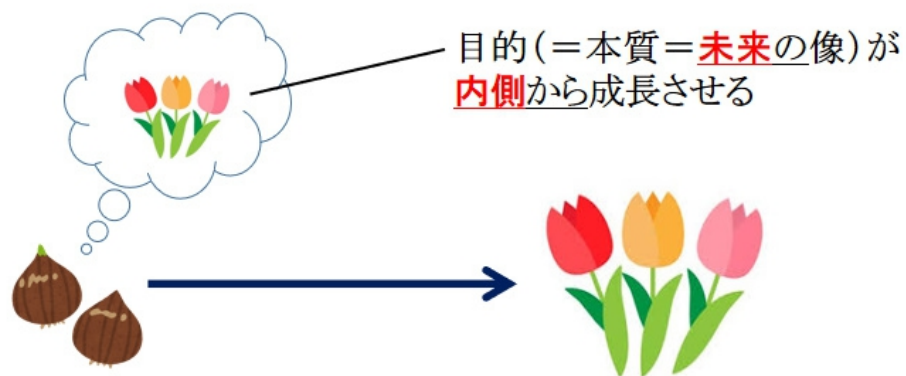


図9 目的論の運動理論は「内から」「未来から」

これに対してデモクリトスの運動理論は「外から」「過去から」です。

原子の内部に何らかのエネルギーがあってそれが原子を突き動かしているわけではありません。ただ単に、外から他の原子が衝突してくるから弾かれるだけです。

そして「衝突した」という過去の出来事が未来の原子の動きを決定しています。

目的論は物体内部にそれを動かすエネルギーを想定していて、その意味では物体をまるで生命体のように見なしているとも言えるでしょう。

それに対して原子（およびそれらからできている物体）は外から動かすから動くだけであって、生命のない「機械」のようなものです。

こういう類比から、デモクリトスのような考え方を（後世の言い方ですが）「機械論」と呼ぶのです。

現代人にとっては目的論のほうがなじみが薄く、奇異に感じられるかもしれません。
それに対して原子論の運動理論はおおむね現代人の考え方にマッチしているでしょう。

ただ歴史的には、デモクリトスの機械論はすぐに忘れられ、アリストテレスの目的論が古代・中世・近世を通じて支配的となってゆくのです。

しかし機械論は2千年ほど潜伏した後、17世紀頃になると復活してきます。

そして物体から神秘的な内部エネルギーのようなものを排除した近代科学の発想につながっていったのです。壮大な世界観の交替が千年単位で起きていることが分かりますね。

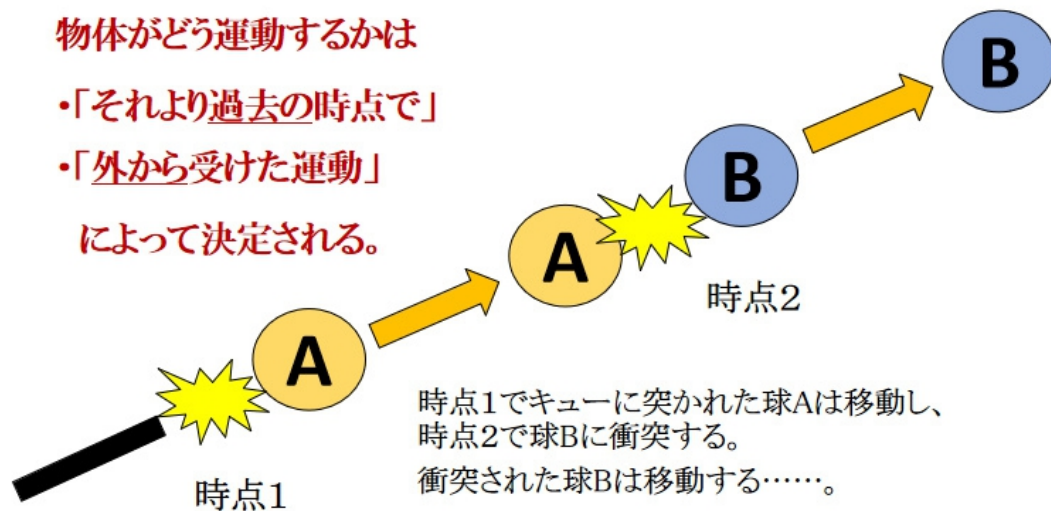


図 10 機械論の運動理論は「外から」「過去から」

デモクリトスと唯物論

またレウキッポスやデモクリトスは「**唯物論**」の元祖と見なされることもあります。

唯物論とは文字通り「モノ（物体・物質）しかない」という思想です。「原子と空虚だけがある」という彼らの思想には確かにそういう面はあるでしょう。

さて「唯物論」と言えば、神や魂などの霊的存在を否定する思想を指すのが普通です。
ところがデモクリトスたちは神や魂の存在を認めているんです。

しかし「モノしか存在しない」という唯物論と、神や魂などの霊的存在がどうして両立するのでしょうか？

簡単なことで「神や魂もまたモノだから」です。人間の感覚では分からない種類ではあるが、それらも物体であることに変わりはないというのがデモクリトスの考えです。

デモクリトスによれば、魂とは体内に入って身体を動かす特殊な原子（の集合）なのです。そして魂を構成する原子たちは人間の死とともに離散します。

神々も存在しますが、それらもまた原子の集合にすぎません。したがって神々も他の存在と同じく解体するというのです。

僕たち現代人は「神」「魂」と聞くと勝手に非物質的なものと考えてしまうから、それらが唯物論と矛盾するように感じますが、そうとは限らないというわけです。

空気も目に見えませんが物質です。神もそれと同じように見えない（おそらく空気よりも繊細な）物質だと想定しても別におかしくはないと考えたのでしょう。

思想史の上でも珍しい考え方ではありますが、近世でも17世紀のイギリスの哲学者ホッブズが似たようなことを言っています。この人も機械論者でした。

これをどう評価すべきかとなると少し込み入った議論になるので、ここでは深入りしないことにしましょう。

ただこういう珍しい思想を知ると、僕たちが知らず知らずのうちに設定している「思考の枠組み」（唯物論者は無神論者である……とか）があることを気づかせてくれます。

宇宙生成論と認識論

デモクリトスは宇宙の生成についても論じています。

無限の空虚の中で飛散していた多数の原子が集まると渦動（渦巻き）運動が始まります。詳細は省きますが、その渦巻き運動の中で原子の離合集散が起こり、そこから大地や天体が形成されていくというのです。

材料だけが違いますが、アナクサゴラスとほぼ同じ仕組みです。みんな渦巻き運動が好きなんですね。

この現象が起きる場所である空虚は無限であり、原子も無限に多くあるため、宇宙生成は空虚の至るところで起きており、宇宙も無限に存在し得るとデモクリトスは言います。

ここで「宇宙」と言っていますが、おそらく「大地とその周囲を回る諸天体」くらいで1つの宇宙（世界）とカウントしていると思われます。

そういう宇宙がたくさんあり得るということで、現代科学のマルチバース理論（多宇宙論）のようなものではなかったでしょう。

なお言い損ねていましたが、ピタゴラス学派（第3章）も「中心火とその周囲を回るいくつかの天体」を1つの宇宙とし、そうした宇宙が多数あると考えていたようです。

またデモクリトスは認識論についても語っています。

例えば視覚については次のように説明しました。

まず対象から発出される「流出物」が空気に刻印を押します。この流出物は薄膜のようなものがイメージされていて「射影像」（エイドラ）と呼ばれています。

そして射影像の刻印を押された空気が眼に入り、眼からつながる通管を通じて魂の原子へ伝達されるとそこで視覚が生じるということです。

4根こそ出てきませんが、対象から発出される「流出物」が知覚に関わっているというのはエンペドクレスと同じですね。

理性的思考と感覚

知覚や感覚は上のようなメカニズムで起きていますが、これに関わる射影像も空気も眼も通管もすべて原子の集合でできています。

こういう諸原子の状態（向き・配列・組み合わせ）はいろいろ変化し、人間の感覚器官の原子状態が変化すると感覚や知覚の内容も変容するとデモクリトスは言います。

同じ食事でも健康なときと病気のときとでは違った味に感じられるでしょう。デモクリトスはこれを感じ覚主体側の原子状態の違いであると説明したわけです。

だとすれば、感覚・知覚というのは真実を伝える手段としては心許ないものだということになるでしょう。

感覚や知覚を通すと同じものでも違った捉え方をしてしまうからです。対象は同じなのに、こちらの眼に異常があると色や形などが違って見えてしまうかもしれません。

それに対して世界の真相（すなわち多数の原子とそれらの運動）を把握したのは理性（ロゴス）による思考です。思考は世界を正しく捉える手段なのです。

かくしてデモクリトスは感覚を「暗い認識」、思考を「真正なる認識」と呼んで2つを対置させます。

この意味でデモクリトスもまた「思考（理性）を上位に置き、感覚を下位に置く」というギリシャ哲学の伝統的発想を受け継いでいると言えるでしょう。

しかしその一方、デモクリトスは「思考だけを信じ、感覚は完全に拒絶する」というパルメニデス（エレア派）的な姿勢とは一線を画しています。

ただ単純に「思考はホント、感覚はウソ」というわけではありません。感覚・知覚される世界（現象世界）だって真実の世界（原子の世界）を土台として成立しているからです。だからこそ「感覚の世界がどうなっているのか」ということを手がかり（媒介）にして、理性は世界の真相へ迫っていくことができるわけですね。

デモクリトスの倫理学

デモクリトスの倫理学（道徳論）に関しても、彼の著作断片がけっこう遺っているので内容が分かるようになっています。

彼は「明朗闊達さ」（エウテューミアー）が人生の目的であるとし、それこそが「幸福」にほかならないと説きました。

明朗闊達に生きるためにはお金や地位に心惑わされるのはなく、魂にこそ配慮しなくてはなりません。

外面的なことに一喜一憂しないためには、節度をわきまえて今あるものに満足する心構えが必要です。節度ある喜びを味わい、平静な気持ちでいる魂が幸福なのです。

こういうタイプの倫理思想はギリシャ哲学においても繰り返し出てきます。原子論者エピクロスなどです（第IV部にて解説予定）。

デモクリトスはいつも朗らかに笑っていたらしく、「笑う人」との異名があります。

この「外面的なことよりも魂に配慮する」という思想は同時代のソクラテス（第II部にて解説予定）とも通底しており、僕としても大いに共感する部分です。

しかしそれがもし「心乱さずに生きられたらそれでOK」ということなら、やや消極的な感じがするのは否めません。

デモクリトスがそうだったかは分かりませんが、彼の影響を受けたエピクロスにはその傾向が強いのです。

まず1つには、ソクラテスが説いたような「人格を向上させる」「徳を磨く」という観点が弱い気がします。

また人間には自分だけの平穏な生活を犠牲にしてでも守るべき「善」「正義」というものもあるでしょう。倫理学ならそういったものにも踏み込まないと不十分です。

デモクリトスの倫理学説だと「厄介な問題からは逃げていればいい」ということになってしまいかねません。

これは人間の「魂」がその人の死によって（原子が離散して）消滅するものだと考えられていることと関係があると僕は思います。

死んで魂が消滅するなら、「魂が存続している期間だけ、なるべく平穏に、苦しみを減らしながら生きられればよい」という考え方になるでしょう。

しかし魂が永遠ならば、求められる「善」や「幸福」の内容も変わってくるはずです。

この問題についてはまた触れる機会がありますから、このあたりで切り上げておきます。

以上で「原子論」の説明が終わりました。

またパルメニデス（エレア派）への応答として登場した「多元論」についても終わりということになります。

さらに「第Ⅰ部 初期ギリシャ哲学」という括りでの話もここで一段落です。

次のサービス「第Ⅱ部 ソクラテスとプラトン」で扱う前5世紀半ばのアテナイでは、これまでとは違った哲学の潮流が生まれます。

ソクラテスとその弟子であるプラトン、哲学史において燦然と輝くスーパースターたちがいよいよ登場します。

魂とは何か？ 徳とは何か？ 善とは何か？ 魂を磨くとはどういうことか？

彼らの哲学は、西洋のみならず世界の思想史のうちでも最良の部類に入るもので、掛け値なしに「人類の珠玉の叡智」と呼べます。

第Ⅱ部の御購入もぜひお勧めいたします！

魂と徳の考察が、あなたの心の宝となりますように。

